

長期研修生

研究報告書

平成元年度

(中学校)

山形県教育センター

は し が き

授業を見るポイントは、小・中・高の教師によって大きな違いがあるという。

低学年を受け持っている教師は子供の行動を細かく観察してその内面の変化を問題にし、高学年を受け持っている教師は教師の授業の構成や教育技術に注目しており、高校の教師はその教材を教師がどの様にとらえ、どんなふうにして子供達に知識・技術を獲得させたかに関心があり、それぞれ、子供の発達過程を重視した視点、先生の指導過程を重視した視点、教材解釈を重視した視点といえよう。これら3つの視点はいずれも重要であるが、一人の教師がそれらの全てをクリアーする事は非常に難しく、お互いの交流によって改善の方向が見えて来るものと思われる。現代のハイテク文化のなかで育っている子供達の成長のみちすじを理解して適切な教育活動を行うためには、小・中・高の先生方の交流によって、子供達が何をして、どのように育ってくるかの実際の過程を知ることが必要であり、教育センターでの長期研修はそういった意味でも大きな成果を上げているものと思われる。

平成元年度は長期研修生として小学校11名、中学校5名、高等学校8名の計24名(3ヵ月22名・6ヵ月2名)の先生方が入所した。

この報告書は長期研修生が日頃の教育実践の中で解決を迫られている課題について研究の成果をまとめたものである。研究の内容についてはまだ十分とは言えない部分もあるが本冊子が学校における教育実践や研究の推進に役立ち、広く活用されることを期待するとともに、率直な御批判をいただければ幸いである。

おわりに、この成果を基に、長期研修生の一層の精進を期待するとともに、関係各位に対して厚く御礼申し上げる次第であります。

平成2年3月

山形県教育センター

所 長 池 田 清

目 次

1. 学習課題の取り組みとその評価

—— 連立方程式の指導を通して ——

中山町立中山中学校 五十嵐 功

2. 山村地域の教材化

—— 地理的及び公民的分野において ——

東根市立第一中学校 堀 野 カヅ子

3. 家庭・地域の変容の中で生徒指導はどうあればよいか

—— 学校と家庭・地域の連携にたって ——

朝日町立朝日中学校 佐 藤 廣 子

4. 中学校歴史的分野における資料作成と活用の工夫

—— 生徒の課題意識を高めるために ——

山形市立第七中学校 田 口 和 典

5. 個に応じた学習課題を見つけるためのパソコンの利用について

—— 短距離走の指導を通して ——

新庄市立新庄中学校 城 水 義 邦

平成元年度

山形県教育センター

長期研修（前期）

研究報告書

学習課題への取り組みとその評価

—— 連立方程式の利用の指導を通して ——

中山町立中山中学校

五 十 嵐 功

＜ 目 次 ＞

I. はじめに	1
II. 研究のねらい	1
III. 研究の方法	1
IV. 研究の内容	
1. 教育における評価の目的	2
2. 連立方程式の意識調査と文章題でのつまずき	3
3. 授業の実際	
(1) 題 材	6
(2) 目 標	6
(3) 指導にあたって	6
(4) 検証授業にあたって	6
(5) 本時の指導	8
(6) 考 察	9
V. 研究の成果と課題	10
VI. おわりに	10

＜ 主な参考文献 ＞

- | | | |
|----------------------------|---------------------|-------|
| ○「教育指導の評価」 | 奥田真丈・熱海則夫編 | ぎょうせい |
| ○「現代教育評価講座」1 理論編 | 梶田毅一他編 | 第一法規 |
| ○「現代教育評価講座」4 算数・数学 | 沢田利夫・杉山吉茂編 | 第一法規 |
| ○「到達度評価とその生かし方」 | 高木一郎 | 図書文化 |
| ○「形成的評価を生かした授業」 | 岩手大学教育学部附属中 | 明治図書 |
| ○「授業過程における形成的評価の研究」(1)～(3) | 山形県教育センター | |
| ○「中等教育資料」 | NO. 436 NO. 546 文部省 | 大日本図書 |
| ○「新・中学校数学指導講座」③ | 阿部浩一他編 | 金子書房 |
| ○「数学教育」 関連号 | | 明治図書 |
| ○「研究紀要」 (昭和63年度) | 山形市立第十中学校 | |
| ○「一人ひとりが意欲的にとりくむ授業過程の追求」 | 山一中 佐藤智恵子 | |

I. はじめに

「生徒一人一人を生かして」の授業をと心がけながら、毎時間の中で、ともすれば生徒の活動の評価をおろそかにして、教師だけで空転している授業が多く、生徒一人一人を生かしていなかったのではないだろうか。

生徒を授業で生かすには、指導の過程や生徒の活動を適切に評価を行なうことによって、指導の改善を行い、学習意欲を向上させるようにしていく必要がある。

自分の実践を反省して、日頃おろそかにしてきた「授業過程における評価活動」を、この研修を通して実践的に学びながら、生徒たちの学習への取り組みがより意欲的になるにはどうすればよいかを考えてみたいと思う。

II. 研究のねらい

本校の生徒は、数学の学力差が大きく、学習に対して消極的な生徒が多い。問題を自ら解こうとするよりは、教師の説明や解説を待つという態度である。また、わかっていることやわかったことでも、自ら発表したり、発言しようとする生徒も少ない。そこで、自らやってみようという意欲を持たせるような課題とその提示の仕方を工夫し、生徒が自分なりに解決したことを認めてやることによって、生徒は学習に意欲的に取り組むのでなかろうかと考えた。

そこで、小学校との関連が強く学年間の系統性もあり、各学年の重点教材でもある「方程式」の、特に「連立方程式の利用」を題材として取り上げて研究を進めることにした。

ここでは、文章題が取り上げられるが、これについては「文章の意味がわからない。」「どういうふうにして式を立てたらいいのかわからない。」などと大半の生徒が「文章題は嫌いだ。」という意識を持っている。問題解決の能力が、今特に求められており、この「方程式」の分野に力をつけてやるのが、数学の能力を大きく高めていくことにもなると考え、研究分野をここに定めることとした。

- ① 課題としてどんな内容をどのように提示すれば、より興味をもって意欲的に取り組むか
- ② 文章題への苦手意識や立式でのつまずきを取りのぞく指導や、指導過程に評価を取りこんだ授業をどう進めるかについて実践的に研究したい。

III. 研究の方法

1. 評価についての理論・文献研究
 - ・評価の意義
 - ・指導と一体化を図る評価のあり方
2. 教材についての分析
 - ・連立方程式についての生徒の意識とつまずきの実態調査をする。
 - ・文章題の指導の問題点とその解消の手立てを考える。
 - ・連立方程式の系統を調べる。
3. 授業実践
 - ・連立方程式の利用の指導で評価を考えた授業を仕組み、検証授業をする。
 - ・考察
4. まとめ

IV. 研究の内容

1. 教育における評価の目的

(1)「評価」といえば、今ではテストをして成績の評定をすることなどと思う人はもういないだろう。その「評定」にしても、文部省は1980年、指導要録の改訂において教科の学習の記録は絶対評価を加味した相対評価を行なうよう通知し、観点別学習状況の欄では学習の達成状況を評価している。

今の教育は「七五三」などと、私たち教師にとって不名誉なことも言われる。いわゆる「落ちこぼれ」であるが、たしかに学力をつけさせるためにも、評価の目的を再確認して、生徒を大切にしたい評価とはどうあるべきかを考えたい。評価の目的として三つあげられる。（「教育指導の評価」より）

①指導の資料を得る。

- ア 児童生徒が指導目標に到達したかどうかを知る。
- イ 児童生徒の個人的差異を明らかにする。
- ウ 学習者の進度の度合いを知る。
- エ 学習を動機づける。
- オ 児童生徒の全般的傾向を知る。
- カ 児童生徒の環境や背景を明らかにする。

②教師の反省の資料とする。

③教育の管理を目的とする。

(2)評価は観点によりいろいろ分類されている。ブルームらは評価の目的や機能、実施時期により 診断的評価 形成的評価 総括的評価に分類している。授業中の評価活動といえばこの形成的評価をいい、これは、生徒の学習を促進させ、教師の指導法を改善させる機能を持つ。

形成的評価とは、「教育活動の過程において、指導方法や学習方法を修正しながら問題点を克服し、意欲的に目標を達成させながら、一人一人の児童生徒の能力を最大限に高めようとする評価のあり方」であり、フィードバック機能が中心になる生徒一人一人の学習を可能にさせるためには、授業過程に評価を位置づけていくことは大事なことである。

(3)評価場面として

① 一時限内で 各時限の授業過程をいくつかの分節に分け、各分節に本時限の目標を達成するための分節目標を設定する。この分節ごとに分節目標に照らして評価し、補充を行なう。

② 単元レベルで 単元の各目標が達成されたかを総合的に評価する。その結果で、補充学習、深化・発展学習へ取り組ませる。

以上の各観点をふまえた評価活動を授業に取り入れて、授業実践をしてみたい。

(4)学習活動と評価方法

分節の学習活動と評価とのかかわり

学習活動	活動中の評価	文節末の評価
個での見聞	表情、動作	発表、挙手
グループでの話し合い	発言、動作	発表、記録
学級での話し合い	表情、発言	挙手、記録
個での作業	操作、動作	発表、記録、作品
グループでの作業	操作、動作	発表、記録、作品

2. 連立方程式についての意識調査と文章題でのつまずき

(1)連立方程式についての意識

連立方程式について生徒たちはどんな意識を持ち、文章題でどんなつまずきをしているかを中山中学校3年36名を対象に調査した。（平成6.7年度）

その結果は

①二元方程式の意味がわかっていない。

二元方程式の例を書かせると正しく書けたのは7人（19.4%）だけで、あとの生徒は何も書いてないか書いてあっても間違っていた。

②文章題は”にがて”

方程式の計算は解けるが文章題は解けない（にがて）のは86.1%で、計算も文章題もどちらも解けない 5.6%を合わせると、文章題はできないと思っている生徒が、91.7%にもなる。

③文章題は”嫌い”

好きというのはい人だけで、嫌いは58.3%である。

④文章題を解いていて「わからない」と思うのは、

方程式ができないとき（55.6%）、問題の意味・内容がわからないとき（33.3%）である。

⑤文章題で ”にがて” な問題を次の内容から2個選択させた。多い順に示すと

ア 速さ・距離・時間の問題 --- 69.4% エ 個数の過不足の問題 --- 11.1%
 イ 濃度の問題 --- 61.1 オ 整数の問題 --- 8.3
 ウ 割合を含む問題 --- 50.0 カ 個数と代金の問題 --- 0
 である。

(2)学力診断検査 「数と式」の領域での学力の実態

方程式の立式と関係のある、数量を文字式で表す問題と立式などの問題の正答率をみた。（教研式・学年別診断的学力検査 平成3.10年度）

	内 容	本 校	全 国		内 容	本 校	全 国
3 年	(1) 連立方程式の解き方	53%	51%	2 年	(1) $(1-x)/4=1-x/2$	20%	10%
	(2) 二元一次方程式の解	36	47		(2) 数量を文字式で表す	43	62
	(3) 文字式の利用	38	26		(3) 数量を方程式で表す	34	26
	(4) 不等式の利用	11	12		(4) 数量を方程式で表す	9	8

(3)文章題でのつまづき調査

(1)の調査の中で一緒に実施した。

①文章題で式が作れないのはどんなときか

文章で回答したその中から主なものをあげると

- ・問題をよく理解できないとき
- ・問題の意味がよくわからないときや、どの数をどこに持ってくればよいかわからないとき
- ・どこに、どうつなげたらいいかわからないとき
- ・式のもとになる文章が見つからないとき などである。

②文章題で立式させる問題で、

未知数を指定したグループと指定しないグループの対比や、距離については表を出したグループと表を出さないグループとの対比では

ア 個数と代金の問題では、どちらのグループにも差はなかった。

イ 個数の過不足の問題では、未知数を指定し連立方程式を作れとしたグループより、自由に立式させた方が一次方程式もあり正答率は高かった。

ウ 速さ・距離・時間の問題では、未知数を指定し図表を示すと正答率は高く、無答者も少なかった。

ウの問題

峠をはさんで11kmはなれたA、B両地がある。ある人がA地からB地へ行くのに、A地から峠までは毎時3km、峠からB地までは毎時5kmの速さで歩いて3時間かかった。A地から峠まで、峠からB地までの道のりは、それぞれいくらか。求めるための方程式を作るだけでよい。

誤答例 ・(速さ)×(距離)で(かかる時間)を表している。

(4)分析と対策

これらの調査結果や実態から

①連立方程式と二元方程式の区別がつかない。

・文字の扱いが場面によって未知数とみたり変数とみたりするので、それぞれの場面でどんな扱いをするのかをはっきりさせる必要がある。

②文章題は立式できないために「わからない、にがて、嫌いだ」という意識を生みだしている。にがて意識を少しでも解消するように、興味・関心を持たせる工夫が必要である。

③文章題がにがてな問題の内容は

・距離についての問題が70%近くで、濃度・割合の問題も50%以上である。量の認識も足りないが、問題文が複雑になりやすいこと、等量関係がかくれている問題が多いことで生徒たちをわからなくさせている。

④文章題ができないのは、

ア 文章を読み取る力がないこと

・語句が難しいことや題意を読み取れないこと、関係把握が出来ないことなどである。

イ 文章から必要な数量を取り出し、関連づけていく力が不足していること

ウ 量の認識が不足なこと

これらは、生徒たちが立式出来ない理由として挙げていることにそのまま対応している。

⑤(2)の学力検査でもこの分野の力の弱さを裏書きするように、しかも全国の傾向と同様に本校の正答率は低い。

文字の使用での理解不足・ドリル不足、文字式で表したときの式の意味の確かめなど、1年生のときの理解と定着の悪さが反映していると言える。

⑥量の関係では、具体的な問題ではわかっている文字を用いて数量関係を表すときの間違いが多い。また、速さ・距離の問題では、文字を使わないときは正答でも、文字を使うと、間違えることが多い。

以上の①～⑥から、つまづきを少なくする手立てとして、次の手順で指導していくことにした。

①「問題をよく読む」・どんな問題か説明できるほどに読む。

・わかっている数量、求める数量を明らかにして読む。

②「数量間の関係を把握する」

・情景図、線分図、表など大いに活用し場面把握をしっかりとる。

③「等しい関係を見つける」・ある操作をしたら、別の量になった場合

・同じ量であって、2通りに見られる場合

④「ことばの式で表す」・量の法則をおさえる

・文字を使って表す

数量関係を文字式に表す。この際、量の学習や文字式の学習が十分なされてばよいが、そうでないことが多い。公式の暗記だけでなく具体的なもので理解させ文字式に表す練習も取り入れておきたい。

⑤「方程式に表す」

5. 授業の実際

〈 平成元年6月29日(木)2校時 〉

中山町立中山中学校2年1組男20名女17名

(1)題材 連立方程式

(2)目標①二元方程式・連立方程式の意味、解の意味を理解させる。

②連立方程式の解き方を理解させ、連立方程式が解けるようにする。

③連立方程式を解くときや文章題を解くとき見通しをもって取り組めるようにする。

④連立方程式を利用して具体的な問題を解決しようとする態度を育てる。

(3)指導にあたって

① 事前調査をしてみると1年の方程式の学習については「難しいけれど解けるとおもしろい」という生徒もいるが「面倒くさくてややこしい」「利用のところが難しい」「全然わからなかったからすっごく嫌い」など、計算より文章題について嫌いだという意識を持っている生徒が多い。文章題に関する調査では「a kmの距離を毎時40 kmで行くときかかる時間を式に表す」問題の正答率は50%、速さについての立式では正解者は6人(16.7%)で無答者は63.9%である。数量関係を文字式に表すことや文章題の立式は抵抗の大きい内容である。

② 連立方程式の利用では

- 問題をよく読む……求めるものに下線を引く、数字を○でかこむなどして「求めるもの」「わかっている数量」「わかってない数量」を読み取る
- 数量を取り出し情景図、線分図、表などから数量間の関係を把握する
等量関係を見つけるためには、線分図、表は必ず書くようにさせる
- 等量関係を見つけことばの式で表す
- 数量を文字式で表す
- 方程式に表す
- 方程式を解く の順序で指導する。

(4)検証授業にあたって

①仮説

課題を身近なものから取り上げ、いくつかの短文にして提示すれば、生徒は意欲をもって取り組むだろう。また、分節ごとの評価により学習状態を把握し、指導の軌道修正を行えば目標達成が可能になるだろう。

●課題の例

中山町から90 km離れたB市に自動車で行くのに、初め高速道路を毎時80 km、途中から普通の道路を毎時50 kmで走ったら1時間30分かった。高速道路と普通の道路を走ったそれぞれの道のりを求めよ。

- 中山町から90 km離れたB市に自動車で行った。
- 初め高速道路を毎時80 kmで走った。
- 途中から普通の道路を毎時50 kmで走った。
- 合計で1時間30分かった。
- 高速道路を走った道のりは何kmか。
- 普通の道路を走った道のりは何kmか。

のようにして提示する。

②仮説検証の視点

- ア 課題を身近なものとしてとらえていたか。(自己評価カード)
- イ 指示は具体的であったか。(自己評価カード)
- ウ 生徒は意欲的に活動していたか。(観察・自己評価カード)
- エ 評価とその後の補充は適切になされたか。(観察・自己評価カード)

③自己評価カード

次のような評価カードを用い授業直後に生徒に書かせる。

今日の学習 をふりかえって 2年()組氏名()

月日		内容				
次の項目について自分なりに、評価してください。						
項 目		良い	← 普通	→	悪い	
1	今日することがわかりましたか。					
2	問題はわかりやすかったですか。					
3	指示にしたがって学習しましたか。					
4	自分の考えを発表しようとしたか。					
5	学習内容はわかりましたか。					
6	興味をもって学習しましたか。					
7	今日の学習でわからないことはありませんか。 あればどこですか。	ない	ある			
8	今日の学習について、どんな感想でもいいから書いて下さい。					

[illegible]

生徒の動きの観察、自己評価カード、授業後のアンケートにより考察した。

ア 課題を身近なものとしてとらえていたか

このような文の書き方がわかりやすい……21人 (37人中)

教科書のような書き方がわかりやすい…… 11人

どちらもかわりない ----- 5人

②問題はわかりやすかったか

わかりやすい……17人 普通……17人 わからない……3人

③解いてみようという気持ちになったか

はい-----19人 いつもと同じ-----16人

(考察) 問題の内容はそう難しいものでもなく、問題文も条件がはっきりしており求めるものもすぐにわかるものであったと思われる。文章の表現形式は学力と関係なく今回のようなのがわかりやすいと答えた生徒が多かった。条件文や求めるものを示す文もはっきりしており、解いてみようという気持ちになった生徒が19人(いつもと同じ16人)いたことから、身近な問題としてやってみようとする意欲を喚起させたのでなかろうか。

イ 指示は具体的であったか

(考察) 指示に従って学習した生徒が25人いた。生徒はよく指示に従って、学習活動にスムーズに取り組めたのでなかろうか。

ウ 意欲的に活動したか

○普段の授業より熱心に学習したか

した 22人 普通.....15人

(考察) この結果とイの考察から、また学習プリントでの学習の様子(それぞれ自分なりの解答を書いていた。)から、個々には熱心に学習したと言える。しかし、発表しようとする態度はあまり見られなかった。

エ 評価活動は適切になされたか

(第1分節) 今日、はじめに学習することがわかった……24人 普通……13人

本時の目標は、もう少しはつきり把握させなければならない。

(第2分節) 等量関係をことばの式で表すが 出来ているのが約半数であった。机間指導しながら、いろいろな線分図の中から二人の生徒に黒板に書かせそれぞれの書き方のよさを認めた。「線分図や表の90km, 1時間30分はどんな数か」とのつまずきをただす発問から、つまずいていた生徒もことばの式に表すことができた。

(第3分節) 方程式に表すこと 未知数の決めかたは全員出来たが、それぞれの数量を文字を用いて表すことでつまづいていた。本時は、方程式の利用の第1教時であり、机間巡視をしながらある程度時間をかけて個別指導をして書かせた。誤答の生徒を指名したら、「違います。」と発言があった。挙手は10人ほど。

(第4分節) 方程式の解き方では、代入法でしようとして式を変形していた生徒もいた。分母の払い方を間違えた生徒も多くいたので、それをとりあげ分母の払い方を復習した。

しかし、時間がなく全員解き終わるまでにいらず、計画のまずさがあった。

(考察) 評価方法としては挙手・発言・記録、動作・個人思考・作業の観察、自己評価によった。

各分節での評価により、目標に達してない生徒には、適宜補充を行なった。その結果、次に進むことが出来た生徒も多く評価活動が効果的だったと言える。

また、授業後の感想に「連立方程式を作ることが少しわかった。」「難しかったけど、表や線分図やことばの式を書いていくと方程式が作れた。」「授業が前よりわかり易くなっていた。」などもあり、目標に近づけたのでないかと思う。

V. 研究の成果と今後の課題

1. 成果

- (1) 授業に評価活動を計画的に取り入れることにより、各分節での学習達成状況を把握できた。また、生徒にとって授業がわかりやすいことを検証授業で確かめられた。
- (2) 生徒たちの発表や活動の中によさを認めていくことは、生徒への学習に取り組む励みとなった。
- (3) 連立方程式については、生徒たちのつまづきや文章題に対する問題点を明らかに出来、その解消のための手立ても見出せた。

2. 課題

- (1) 評価は、幅が広く奥行の深い課題であり、ほんの一部に触れただけにすぎない。範囲を広げずに毎時間の授業に関わるところでの実践をしたい。
- (2) 生徒一人一人を生かした授業、評価のあり方を実践を通して求めていく。
- (3) 一時間だけの検証授業であるので、この研修で作成した学習プリントなどを使つての検証、その他の題材での実践など、これからがスタートである。

VI. おわりに

この長い研修期間に、普段出来ないことをやれたらなどと思い臨んだが、あっという間に終わってしまった感じです。今回の研修を土台に、これからの実践を続けたいと思う。

最後になりましたが、長期にわたり暖かくご指導くださいました伊藤和夫先生はじめ、県教育センターの先生方、ならびに、研修の機会を与えてくださいました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成元年度
山形県教育センター
長期研修 (前期)
研究報告書

山村地域の教材化

——— 地理的及び公民的分野において ———

東根市立第一中学校教諭

堀野カヅ子

目次

I 主題設定の理由	1
II 研究の方法	1
III 研究の内容	2
1、教科書における山村の取り扱い方	2
2、山村に対する生徒たちの意識調査から	2
3、山村地域の調査から	3
4、山村地域の教材化にあたって	6
(1) 地理的分野において	7
(2) 公民的分野において	8
(3) 本時指導案	9
IV まとめと今後の課題	10
V おわりに	10

主な参考文献

・ 中学校指導書	社会	文部省
・ 社会科教育	NO, 321 323	明治図書
・ 地域社会の変貌と 住民意識	河野健二編	日本評論社
・ 新地方の時代を読む	阿部孝夫	学陽書房
・ 次年子部落と学校の記録	次年子百周年記念実行委員会	
・ 山村に於ける生活の実態調査	山形市立商業高校産業調査部	
・ 大石田町次年子地区の過疎集落 実態調査報告書	山形県大石田町	

I 主題設定の理由

日本の歴史にかつて類を見なかった激しさで進んだ昭和30年代後半からの高度経済成長は、その後の日本に様々な影響を与え続けている。

かつて林業や農業に従事して、自給自足的な生活を送っていた山村も、その影響を大きく受けている一つである。燃料革命による薪炭産業の不振、都市における労働力の需要増、生活の近代化にともなう支出増等で、村を出、都市に行く人々が増加し、やがて一つの村として維持できなくなるところも出てきているし、何百年も続いた村が、すでに消えてしまったところさえでてきている。

このような、過疎地に住む人たちは、日本の総人口の10%にも満たないために過疎の問題は、そこに住むわずかな人たちのものとして、見過ごされてきたきらいがある。しかし最近、山村の荒廃は、国土保全、水資源の確保等から見ると見逃すことができないことであり、国民全体の問題であると主張する人たちがでてきている。農村も含めた農山村の過疎化は、都市の過密化につながり、日本の社会全体が大きくゆらぎ、これまでのものの見方・考え方も変えてきており、このことと子供たちの非行や反社会的行動とを結びつけて指摘する人も多い。

このような中で、最近、農山村の見直し論が各方面でなされるようになった。「ふるさと創世」「村おこし」「町づくり」「地方の活性化」等々の言葉が多方面で使われだしていることからもうなづける。

上のような時代の動きを見たとき、ややもすれば素通りしがちな山村の学習が、実はこれからの日本のあるべき姿や、自分自身の生き方を考えさせるにふさわしい教材ではないかと思うようになった。それには、具体的に今過疎地はどうなっているのか。そこに住む人たちはどんな努力をしているのか等を調査し、それにもとづいた教材化を図らなければならないと思い本主題を設定した。

II 研究の方法

- 1 高度経済成長期をはさんで、小中学校教科書において「山村」はどのように扱われてきたか調査し山村の教材化の一考とする。
- 2 山村に対する生徒たちの意識調査をする。(勤務校 2、3年1学級ずつ)
- 3 山村地域(大石田町次年子地区)を実地調査する。
- 4 山村地域の教材化を図る。
 - ・ 地理的分野——日本の諸地域(「東北地方」)
 - ・ 公民的分野——「工業化にともなう諸問題」

Ⅲ 研究の内容

1. 教科書における山村の取り扱われ方

(教科書は北村山小中学校使用の東京書籍を活用)

年度ごと、学年ごと一覧表をつくってみてわかったこと(一覧表は省略)

- ① 教科書はよく時代を反映している。(特に小学校において)
- ② 昭和36年度の教科書では山村の記述が多く、しかも、植林を大切なものとして扱っていたのに対して、41年から61年では植林は教科書から消え過疎の記述が多くなる。しかも「交通不便」「楽でない暮らし」など農山村蔑視に通じるような記述のみである。
- ③ 上の②は中学校の41年から59年にかけても同様といえる。
- ④ 昭和64年度の小5年の教科書では、住民自身の手による町づくりとして山形県の小国町を出している。さらに、緑の大地を守るとして、再び植林の大切さ、国土を守る大切さを扱っている。
- ⑤ 中学校の教科書では山村の扱い方が、だんだん少なくなっていき、64年度では7地区分のような町づくりについては、まだである。しかし過疎化が一番最初に進んだ中国・四国地方において、山村の荒廃を防火や治水上の問題と結びつけて扱えるようだし、過疎化をくいとめる方策として、東北地方において、出稼ぎの村に代わって、スキー場ができたことで変った農山村の例が出てくる。

2. 山村に対する生徒たちの意識調査とレディネス調査から

(東根一中2年6組・3年2組……5月26日実施)

(1) レディネス調査からわかったこと

問 高度経済成長期において、山村の林業や牧業はどう変ったか

答案の実際

2年……「ふえた」「へった」2名のみ記入

3年……「木炭の生産が減った」「石油に取って代られた」「外国の安い肉にまけた」などが特に多かった。その他

- ・生活がまかなえなくなった。
- ・林業より高収入な仕事が都会にはある。

などで、正解率は85%と2年生と大きな開きがみられた。2年生では、高度経済成長期といわれた年代、背景等を押さえて授業に入る必要があることがわかった。

(2) 山村という言葉のイメージ

- ・2、3年ともほとんど差がない。
- ・プラスイメージ(空気がうまい 静かでのんびり 新鮮な水等)
- ・マイナスイメージ(不便 明るくない ださい おもしろくない等)

(3) 北村山地区内、県内にある山村名の記入

- ・2年よりも3年の方が、男女とも多くの地名をあげている。
- ・身近な地域の学習の成果や、日本の諸地域の学習を通して地域を見る目がついたためと思われる。

3. 山村地域(大石田町次年子地区)の調査から

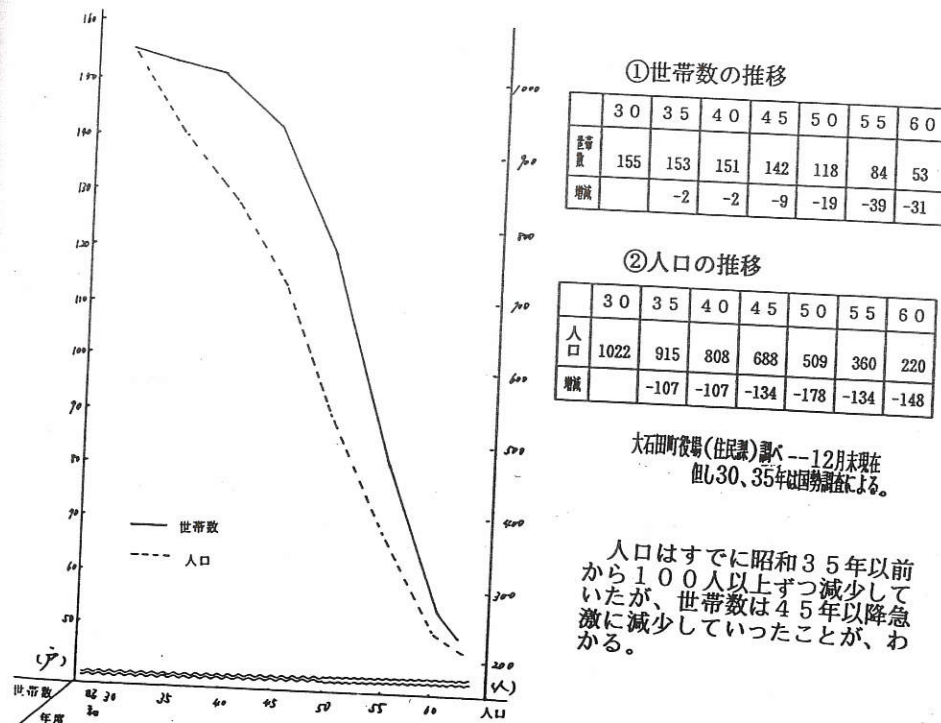
(1) 次年子地区の地理的位置・歴史的背景

山形県の中央部村山盆地の北部に位置する大石田町(北緯38°36' 東経140°21')その大石田町より西部山間部に入ること13kmに当次年子地区は存する。県内屈指の豪雪地帯であると同時に、江戸時代には最上川の中継地として栄えた。大石田町この町全体の人口動態は、総人口、総世帯数ともに昭和25年をピークに漸減にはあったが過疎法の適用を受けるまでには至らず、新過疎法施行時になって指定を受けることになったのである(昭55年)。ところがその中であって次年子地区だけは、激しい過疎化が進み、昭和51年度に「特定農山村振興特別対策事業」の指定を受け、生産基盤整備や生活環境整備に当たっていたのである。

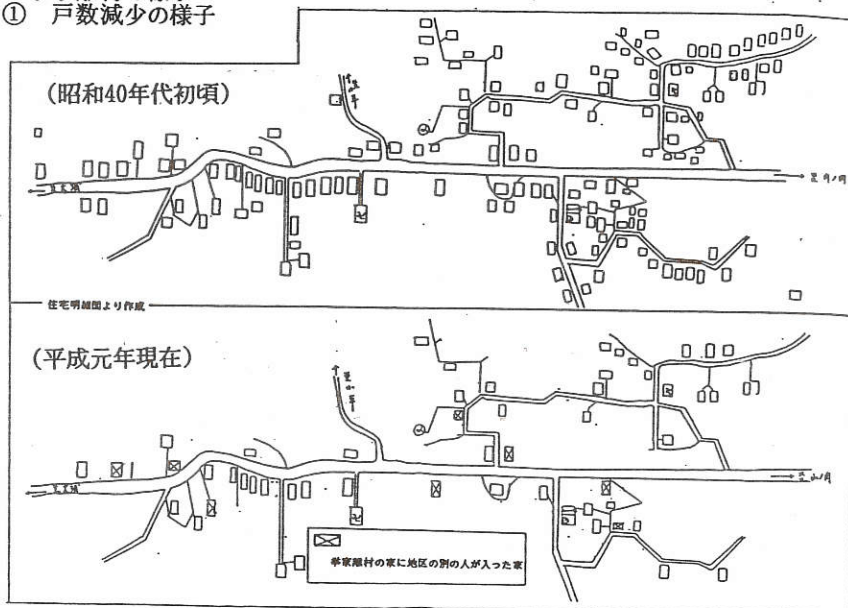
- ・次年子という地名は
・大同2年(800年初)開村で2を次とした。
・あまりにも奥山にあるため、子供が生まれても届け出は次の年になってしまう。
・康正年間(15世紀頃)秋田の笹子(ジネゴ)からお里という女が来て、名主十兵衛に世話になった。そのお里の第二の故郷ということで、次年子と命名した。

等々がある。
なおお里については、箕の製法を村民に伝授。これが、生業の大きな支えになったという。事実箕は昭和30年代までは近郷の農家にとっても欠かせないものでありそのため次年子の人々はひと冬に一人で200枚前後の箕をつくり、売り歩いたという。その代金は、一人当たり米10俵分にもなったという。したがって、次年子は他の山村と異なり、生計の主は箕であり、次に米、木炭であったという。しかし、農業の近代化、機械化と同時に箕の必要性も低下し、現在は、ほとんどつくられなくなってしまい過疎化が進行中なのである。

(2) 人口・世帯数の動き



(3) 挙家離村の様子
① 戸数減少の様子



② 挙家離村者の転出先 (年度別)

	昭25	30	40	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	計
関東方面		3	3			1	1		1		1	1		1	1	1			1	15
上以外(縣)		1	2								1					1				5
山形市			1			2	1				2		2							8
天童市		1		1	2			1	1		1						2	1		10
東根市			2		1		1	2	2	6	2		1	3	6	2	3	2		33
村山市			1																1	2
尾花沢市																				0
寒河江市									1											1
町内							1	1	1	2	1	1	5	2	1	1	1			17
県内	1		1																	2
不明			1	1																2
計	1	5	11	2	3	3	3	4	6	7	9	2	4	9	10	4	6	4	2	95

上の①の略図は住宅明細図をもとに産業組合の方々に聞いて、作成したものであるが、歯が抜けるように挙家離村した様子がわかる。
また、②の表からは、100軒近くある挙家離村者の転出先について、不明はたった2軒だけであるし、さらに次のこともわかる。
・ 40年代前半までの離村者の転出先は、関東方面が多かったが、45年以降になると県内が多くなる。
・ 県内の中でも、特に東根市へが多く、大石田町内への約2倍になる。

(4) 農業センサスからみた次年度の様子

① 農家数と専、兼業及び兼業の内容・経営規模

年	総農家数	専業農家数	兼業農家数	雇用	兼業	自営	0.33 以下	0.3-0.5	0.5-1.0	1.0-2.0	2.0-3.0	3.0% ~
昭45	122	2	75	45			16	26	63	17		
		1.6%	61.5%	36.9%			13.1%	21.3%	51.6%	13.9%		
50	107	0	23	84	17	81	15	18	51	22	1	
			21.5	78.5	15.9	75.7	14.0	16.8	47.7	20.6	0.01	
55	75	0	18	57	27	38	9	10	31	17	7	1
			24.0	76.0	36.0	50.7	12.0	13.0	41.3	22.7	9.3	1.3
60	49	0	11	38	16	24	10	4	17	7	5	6
			22.4	77.6	32.7	49.0	20.0	8.1	35.0	14.3	10.2	12.2

② 耕地面積、作物等の変容

年	田	増加率	畑	増加率	保有山林	増加率	樹園地
45	6083		1853		357		
50	6067	-0.2%	1432	-22.7	273	-23.5	100
55	5157	-15.0	1867	30.4	397	45.4	45
60	4319	-16.2	1837	-1.6	227	-42.8	0

③ 畑作物種類別 収穫面積

年	雑穀	いも類	豆類	工芸農作物	野菜類	飼料用作物
50	3	150	168	125	739	60
55	38	106	186	120	1303	65
60	143	50	69	67	1114	270

④ 家畜種類別飼養農家

年	乳用牛	肉用牛	頭数	頭数
50	4	5	33	76
55	2	9	21	110
60	1	2	6	139

以上農業センサスを通して、次年度地区の産業の様子をみた。一言でいえば、戸数急減のなかでも第二種兼業農家の急増と、兼業の内容が、出稼ぎ日雇い等の不安定なものから会社員等の恒常的勤務や自営業等安定したものへかわってきている。さらに農家数の急減は、残った農家の経営規模拡大を生んでおり特に昭和45年に存在しなかった2ヘクタール以上の農家が60年には、11戸にふえていることは特筆すべきことである。

また、田、畑、山林にわけて耕地面積の動きをみると、畑地の健全化が目立つ。畑地のなかで多くを占めるのが野菜類であり、増えてきているのが、飼料用作物である。また家畜の種類を見ると肉用牛が増えていく様子がわかる。

過疎化の中にあつて、地区に残った人たちのなかの、兼業として安定した仕事を求めつつ、経営規模を拡大し地域にあった作物(高冷地野菜)の栽培や牧業に活路を見いだそうと努力しているといえる。

(5) 調査を通して

① わかったこと

- ・ 170戸、1500人以上もあった戸数、人口は、今は53戸、210人まで減ってしまった。戸数にすれば三分の一に、人口にすれば七分の一の減少である。
- ・ 離村者は以前は4・5月が多かったが、最近では11月の転出が目立つ。(雪を前にしての転出であろうか)
- ・ 挙家離村者の転出先が、昭和40年頃までは関東方面が多かったが、最近では、特に東根市へが多く、全体の半数を超えている。
- ・ 農業センサスで見ると、次年子に残った人たちは、経営耕地を拡大し、畑作物(高冷地野菜)と牧業(肉用牛)に力を入れている。
- ・ 児童数が激減している中でも、運動面・文化面ですばらしい活躍をしている子供たち。
- ・ 次年子地区に対する町当局の協力に「人がよくよくいない所に、無駄金を使うな」という他地区民の非難とそれを受ける地区民の苦悩の多さ。

等である。

② 思うこと

特に上の⑤については、経済効率のみを追求してきた私たちが陥りやすい考えであるが、目を外国に転じてみると、スウェーデンでは1970年代のオイルショック後「すべての地域が生き生き」という政府のキャンペーンのもと「住みたいところに住む権利」を認め地方に暮らす権利を保障する政策として、過疎地に移り住んで仕事をする人に、たとえ一人でも助成金を出して援助しているという。その結果テルベリーという村には、25件の実例ができ、村の再生につながっているという。

そろそろ我々日本人も過疎の問題は過疎地に住んでいる人のこととせず自分たちの問題としてとらえ、これまでの「物質中心主義」・「生産至上主義」の考えから脱却することが必要になってきたのではなかろうか。それが何よりの過疎対策のような気がするし、我々のものの見方・考え方を変えていくチャンスであると思う。

4 山村地域の教材化にあたって

① 地理的分野において

国土保全、水資源の確保上の問題については、中国・四国地方で特に強調しておく。

「東北地方」の中に位置付けたが、先ず自分たちの住む地方の現状を捉えさせると同時に誇りを持たせ、価値観の転換を図っていききたい。即ち、みちのく——いなか——みじめではなく、いろいろ模索する中から新しいものの考え方や見方を生み出せるところとして捉えさせたい。そして「山村はださい」というイメージをくずすためにも、本時の中で、あえて「人口減少で良い点」を取り上げ、この中で模索する山村の人々の姿を考えさせていきたい。

② 公民的分野において

工業化にともなうでできた諸問題の中から、今後の望ましい発展のあり方をみる基盤として、すでに勉強した人権との関わりで考えさせたい。即ち、一人一人の人間が大切にされているかという観点で、特に小平地区に残った1老人の話を、本時過程の中に入れる。

題材 東北地方

目標 道のくといわれた東北地方も日本経済の影響を強く受けながら村おこし、町おこし、国際化へと新しい時代に対応しようと努力していることをとらえさせる。

展開

主 題	指 導 内 容	時間	指 導 目 標	資 料
自然と歴史的背景	位置とあゆみ 自然の特色	1	東北地方が道のくといわれるわけを自分たちが持っているイメージと併せながら考えさせる。	東北地方の一人当たり 県民所得 工業生産の対全国比
進んだ米作と 減反政策	日本の穀倉地帯 農地改革と 生産性の向上 食生活の変化と 減反政策	1	戦後の農地改革により、東北地方は日本の米作の先進地となったが反面、その後の減反政策により、苦しい立場に追い込まれていることを理解させる。	地方ごと反当たり収獲高 八郎潟の農業
ゆれる農山村	専業農家と 兼業農家 人口動態と 日本経済の動き	1	農山村における人口の減少は、高度経済成長で必要とされた工業部門や都市への移動のためであったことをとらえさせる。	専業農家と兼業農家の 動態 次年子地区の 県外転出状況 産業構造の変化図 日本における人口 減少地域図
過疎化の進む村	次年子地区の位置と あゆみ 人口、世帯数の動態 次年子地区の 小中学生	1 本時	次年子地区の過疎化を通して山村に生きることのきびしさをとらえさせ、その中にも人々は様々な工夫や努力をしていることをとらえさせる。	次年子地区の人口動態 山村に対する生徒たちの 意識調査 耕地規模の変容 「山村は今」から抜粋の 文章
村おこし、 町おこし 国際化	ふるさとを 見なおす動き 住民意識の向上 外国視察団	1	今、各地で、村おこし、町おこしがおこっていることをとらえさせ、その成功は新しい時代の発展につながることに気づかせる。	新聞記事 朝日町の例 海外技術研修員 「地方の時代」からの 抜粋の文章
交通網の発達と 新しい工場の進出	伝統的産業 東北自動車道と 新幹線 IC工場の進出	1	従来の工業立地にとらわれない工場進出が東北地方にも見られるようになり、それに対応するように、交通網の発達にもすばらしいものがあることを理解させる。	東北地方の工業生産の 伸び率 東北地方における 新産業都市 最近の工場進出地

題材 工業化にともなう諸問題

目標 経済の成長にともない公害、都市問題、資源問題等様々な問題が出てきたことをとらえさせ、今後の望ましい発展のあり方を人権との関わりで考えようとする態度をそだてる。

展開

主 題	指 導 内 容	時 間	指 導 目 標	資 料
公害の発生	日本各地に生じた公害 公害の原因 四大公害裁判 公害防止にむけて	1	工業の拡大にともない、発生した公害の種類や被害の様子をとらえさせ、望ましい対応のありかたを考えさせる。	「水俣病がうばった幼い命」文章抜粋 公害認定患者数の推移
都市問題	過密化 交通問題 都市災害	1	都市問題の現状を、交通、災害、公害そして生活環境の面から具体的にとらえさせ人権との関わりでとらえさせる。	各県の面積と人口 大都市の地図 憲法第25条
農山村問題	過疎化 住みたいところに 住む権利の喪失 山林の荒廃と 国土保全の問題	1 本時	農山村より都市への人口移動現象と過疎について、人権や国土保全上の問題とかかわらせて考えさせる。	山形県人口の推移 山形県内における人口動態 次年子地区の挙家離村の様子 文集次年子
食料、資源問題	兼業農家の増加 低下する食料自給率 限りある資源 資源の有効活用を求めて	1	わが国の食料問題について、農業生産のあり方をもとに考えさせると同時に資源問題も含めて、国際分業、貿易問題等、広い視野からとらえさせる。	各国の穀物自給率 日本の資源の海外依存率
日本経済の望ましい発展を求めて	意見のまとめと発表	2	工業の発展は様々な問題をひきおこしているが、今後このような問題を解決の方向に持っていくながら、さらに望ましい発展を目指すには、どうすれば良いか、意見・考えをまとめ発表しあう。	自作プリント

(3) 本時指導案（公民的分野）

主題 農山村問題

学習のねらい	学習活動と主な学習内容	指導上の留意点・資料
人口動態を読み取ることで、山形県と首都圏の人口動態をグラフ化する。そこから読み取れることを発表しあう。	本時のねらいを知る。 山形県と首都圏の人口動態をグラフ化する。そこから読み取れることを発表しあう。	過密の衰退しとしての過疎問題であることをとらえさせる。 人口動態の推移 首都圏人口の推移 首都圏の過密化は果人の移動も大いに関係していることをとらえさせる。
県内の人口動態を説明できる。	山形県内の地域別人口動態から県内の動態を詳しく知る。	県内地域別人口動態 山形市周辺はむしろ増えていることを押さえておく。 挙家離村の様子図 アンケート結果 文集次年子
次年子地区の問題点を指摘できる。	次年子地区の人口動態、世帯数動態からどんな問題点があるかを発表しあう。 地区民の文章から山村生活の様子を知る。	前向きに生きている文章から山村生活のすばささと、良さをとらえさせる。 集団離村した小平地区位置、歴史、移転後の様子などTTPで提示し説明する。 特に1軒のみのこった老人の話を聞く。
住みたいところに住む権利について意見をまとめることができる。	小平地区の側から、山村地区に住みたくとも住めなくなることの意味を考え、話し合う。 小平地区の一人老人の問題は憲法25条からみると、どういえるのが、意見をもとめ発表しあう。	集団離村した小平地区位置、歴史、移転後の様子などTTPで提示し説明する。 特に1軒のみのこった老人の話を聞く。 他人事としてでなく自分たちからの問題であるとして押さえてほしい。

(3) 本時指導案（地理的分野）

主題 過疎化の進む村

学習のねらい	学習活動と主な学習内容	指導上の留意点・資料
次年子地区の場所とあゆみを指摘できる。	本時のねらいを知る。 次年子地区を地図上で確認しこの地区のあゆみを知る。	TTPで場所提示 地区の写真も準備する。 1000年近くも続いた村であることを強調する。
人口動態から気づいたことを発表しあう。	次年子地区の人口の動きをグラフ化し気づいたことを話し合う。	年度別人口
人口減少の理由を指摘できる。	次年子地区の人口減少の理由を前時の学習内容などから、説明しあう。	前時の学習内容を思い出すため、前時のまとめのTTPを準備
人口減少で困ることとを指摘できる。	人口減少で困る点を予想し発表しあう。	アンケート結果をTTPで提示
人口減少のものをとらえさせる。	人口減少のよい点を予想し発表しあう。	観念的に知っていることを、できるだけ実験としてとらえさせたい
文章から山村生活の重みをとらえさせる。	「山村は今」を読んで山村生活の重みと、国土保全の大切さを知る。	この活動を特に重視する。 新地の開発拡大 村民の気持ちの高まり 山梨県 スキー場 そばづくり 小規模牧場の行き届いた教育 すばらしい成果 「山村は今」 日本林業ジャーナリストの会編 清文社

IV まとめと今後の課題

まとめ

- ① 社会科の教科書において、山村はこれまで軽く扱われる傾向にあったが、今年度版（昭和64）の小学校5年生用において、過疎の中における町づくりの例として、山形県小国町が出され、また「緑の大地を守る」という項目も起こされ、国土保全の大切さをも学習するようになってきている。
中学校においても、中国・四国地方において、森林の荒廃は防火や治水上の問題であるという点での学習がおこなえることになったのは、時代の反映であることがわかった。その際、他人ごととしてでなく自分たちのこととして捉えさせることが、自分の生き方にもつながっていくことがわかった。
- ② 生徒たちは、山村について住み安さ、住みにくさ等については、ほぼ正確な捉え方をしているが、イメージとしてあげた中に、「ださい」「明るくない」というような、軽蔑的な捉え方もあった。
授業の中で、山村に住む人々の工夫や努力から、自分自身の生き方を学ばせていくことの必要性を感じた。
- ③ 大石田町の中の次年子という一つの地区を見ても、高度経済成長が大きな影響を与え続けていることがわかった。
- ④ 7地方区分学習では、山村地域の学習の位置付けは非常に難しい。

今後の課題

- ① 山村地域の学習の位置付け
 - ・「地理的分野」で扱う場合「人口集中の著しい地域と過疎の進んでいる地域」という扱いが最適と思われるが、従来の7地方区分との兼ね合いをどうするか。
 - ・公民的分野でも「人権」「高齢化社会」でも扱えるが、そのときの指導計画をどうするか。
 - ・次年子からの転出者が東根市へ一番多かったが、身近な地域で山村を扱う場合の指導計画をどうするか。
- ② 新指導要領の選択時間の取り扱い方（山村学習などのテーマで）はできないか吟味してみる。
- ③ 研修期間中にたてた指導案で実際授業をやり、生徒の変容をみること。

V おわりに

20年近く前初めて教師になって着任したのが、実は次年子であった。僻地4級ではあったが、民家に下宿し不自由しない生活を送らせてもらった。そして今、都市部にあたる東根一中に勤務している。生徒たちのなかに何人かの次年子出身者がおり、赴任した昭和47、8年頃も少しづつ挙家離村が始まっていたが、その後どうなったのだろうかと思いつづけていた。そのうちの、いくらかが解明でき「ホッ」とした気分である。ここまでやってこれたのも、長期にわたる研修の機会を与えてくださった関係各位、そして教育センターの山科先生はじめ諸先生おかげと感謝申しあげます。

平成元年度
山形県教育センター
長期研修（前期）
研究報告書

家庭・地域の変容の中で 生徒指導はどうあればよいか

——— 学校と家庭・地域の連携にたつて ———

朝日町立朝日中学校教諭
佐藤 廣子

I. はじめに	1
II. 研究のねらい	1
III. 研究のすすめかた	1
IV. 研究の内容	
1. 子育てに関する調査について	2
2. 調査結果	3
3. 調査結果からみられる問題点と課題	7
4. 連携の具体的方策	
(1) 授業参観を通して	10
(2) 進路学習を通して	13
(3) 社会教育団体との連携を通して	14
V. まとめと今後の課題	16
VI. おわりに	16

主な参考文献

- | | | |
|-------------------|-----------|-------------|
| ・「生徒指導の手引き」 | 改訂版 | (文部省) |
| ・「生徒指導資料集」 | 第11集、第20集 | (文部省) |
| ・「学社連携の理念と方法」 | 日高幸男他 | (全国社会教育連合会) |
| ・「新しい生徒指導の視座」 | 全国教育研究所連盟 | (ぎょうせい) |
| ・「現代の家庭教育」 | 文部省編 | (ぎょうせい) |
| ・「地域社会の変貌と生徒指導」 | 河野重男他 | (明治図書) |
| ・「学校、家庭、地域と非行防止」 | 岡本包治他 | (ぎょうせい) |
| ・「生き方にせまる進路指導」 | 岡村鍾次郎 | (ぎょうせい) |
| ・「中学校学習指導要領の展開」 | 改訂版 特別活動編 | (明治図書) |
| ・「学校運営研究」8 | | (明治図書) |
| ・「学級活動、学級指導の実践資料」 | 杉田儀作 | (暁教育図書) |

I. はじめに

急激な都市化、産業化の進行にともなって地域社会はいちじるしい変貌をとげてきた。それにともなって、家庭や家庭生活にも変化が認められ子どもの成長や発達に大きな影響を与えていることが各方面から指摘されている。

私の勤務地も、高度経済成長の下農業を主体としてきた地域から企業等の就労形態へと大きな変化があり、人口の移動、流出によって地域が様変わりしている。家庭においても、子どもの養育やしつけに対する父母の意識にも変化が見られ、家庭の教育力が低下していることが問題にされている。

学校ではおもてだった問題行動はないものの、心や生活に問題をかかえる生徒がふえ生徒指導はむずかしくなっている。このような中で、生徒指導の目標に、生徒一人ひとりに「自己指導力の育成をはかる」ことをかけ、生き生きとした学校生活をもとに将来にわたって強く生きていけるための指導援助をめざしている。

充実した生徒指導を推進していくためには、生徒の成長と切り離すことのできない家庭と地域との結びつきを重視し、学校の教育活動の中だけのとりくみから学校外へも目をむけた新しい視点に立つ総合的な生徒指導のあり方が検討されなければならないと思う。それは、学校と家庭・地域の連携にたった生徒指導である。

三者の連携については、子どもの非行や問題行動が多発し対症療法に追われるようになった昭和55年以降強調されるようになった。

しかし、家庭や地域の実態の把握はもとより、連携についても確かな視点に欠けるものであったり、一方的であったりしてかけ橋をどこにどのようにかけるか具体化されることが少なかった。

この研修を機会に、子育ての調査をはじめ生徒指導に必要と思われる諸調査を手がかりにしながら課題をひろいあげ、生徒指導のあり方についてまとめていきたい。

II. 研究のねらい

生徒・家庭・地域の実態を調査によってとらえ、そこから課題をつかみ学校・家庭・地域の連携にたった生徒指導のありかたをさぐり具体的方策を提示する。

III. 研究のすすめかた

- (1) 朝日中の全家庭を対象に、「子育ての調査」を実施し生徒の生活の基盤である家庭教育の現状や親の意識を把握する。
- (2) 調査の分析と考察を行い、生徒指導をすすめるうえでの問題点と課題を明らかにする。

(調査の分析と考察にあたっては、「町の基本調査」同時期に学校で実施した「生徒指導検査」「食事調査」を参考にする。)

(3) 調査結果をうけて、学校として今後とりくむべき課題を明らかにするとともに連携の具体的方策を提示する。

IV. 研究の内容

1 子育てに関する調査について

- (1) 調査のねらい 家庭教育の現状と親の意識を明らかにし、生徒指導を進めるうえでの問題点をつかむ。
- (2) 調査の対象者 朝日中学校の全保護者400名
- (3) 調査の方法 質問選択技法(一部自由記入)
- (4) 調査期間 平成元年6月9日(金)～平成元年6月14日(火)
- (5) 調査の回収率 96%(内回答者父親86.2%・母親13.3%・祖父0.5%)
- (6) 調査項目
 - ① 家族形態
 - ア. 家族構成
 - イ. 子どもの数
 - ② 父母の就労の状況
 - ア. 父親の職業
 - イ. 母親の職業
 - ③ 子どもへのかかわり方
 - ア. 子どものしつけに中心になってかかわってきた人
 - イ. 親から見た子どもの姿
 - ウ. 親が望む子ども像
 - ④ 子育ての悩みや不安
 - ア. 親が抱えている子育ての悩みや不安
 - イ. 子どもについての悩みや不安
 - ⑤ 親子のふれあい
 - ア. 家族そろっての一週間の夕食の回数
 - イ. 子どもと一緒にの時の話題
 - ウ. 親の仕事についての話題
 - ⑥ 子どもの将来についての親の考え
 - ア. 子どもの進路についての親の考え
 - イ. 進路について親と子の意見が対立したときの結論の出しかた
 - ウ. 子どもの将来の居住地について
 - ⑦ 子どもの教育について学校教育に望むこと

2. 調査結果(詳細は別資料に)

(1) 家族形態

夫婦と子ども	夫婦、子ども、 祖父母	夫婦、子ども、 祖父か祖母	父と子	母と子	その他
18.1%	43.0%	31.2%	0.7%	2.2%	4.8%

夫婦・子ども・祖父母で構成する家族形態は、圧倒的に多く43.0%、ついで夫婦子どもと祖父母のいずれかが31.2%、そして夫婦と子どもだけの核家族は18.1%となっている。三世代をこえる多世代家族は4.8%、残る2.9%は単親家族である。

この調査から本校の生徒の家族構成は、夫婦・子どもと祖父母または祖父母のいずれかの拡大家族は全体の74.2%を占めており、三世代同居率が全国第一位の県平均をはるかにこえていることがわかった。

核家族18.1%は、国の76.0%、県の45.7%(県統計課調査)と比較するときわだって少ない。65才以上の高齢人口が20.0%をこえ、県一位となっている朝日町での祖父母同居の特徴的な家族形態がみられる。

(2) 母親の就労の状況

定職	パート	農業	自営	内職	無職
53.4%	2.7%	21.4%	9.0%	8.5%	5.0%

内職は8.5%、パートとして仕事に従事しているのは2.7%と少なく、農業と自営をあわせて30.4%、定職をもつ母親が53.4%と多い。職業についていない母親はわずか5.0%にすぎない。

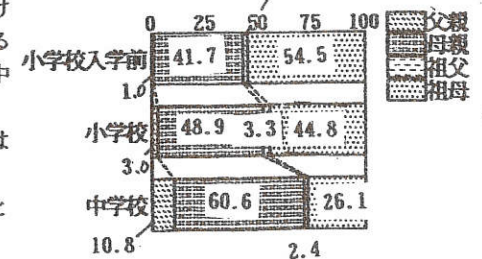
定職についている母親の大半は、町が誘致した企業で働いており「農業」に従事している母親(21.4%)とともに、残業を含め厳しい勤務についていると思われる。

共稼ぎ家庭が86.5%にもなり、この数値は国の45.8%、県の67.0%をはるかにこえている。

(3) 子どものしつけに中心になってかかわってきた人 (2.8%)

家族の中で、だれが子育てしつけの中心になってかかわってきているかを小学校入学前、小学校そして中学校と三段階にわけて調査した。

その結果から、小学校入学前では母親(41.7%)をしのいで、祖母(54.5%)があたってきていることがわかる。



小学校では、祖母と母親とが半々となり、中学校になると母親が子育ての中心になる。学年が進むにしたがって、父親の介在は多くなるというものの子育てに関して父親の手がいかにかかっているかが注目される。

子どもの成長にとって大切な幼児期に、祖父母が子育ての中心となってきた家庭が57.3%と半数をこえること。小学校入学ごろからしだいに母親のほうへ移ってきている。しかし、もっとも手をかけなければならない時期に、親の手がかかっていないことがわかる。母親の就労率が高まり、家庭における子育ては祖父母依存型に変わっている。このようなことから、家庭でのしつけ、特に基本的生活習慣の育成などが出来にくい現状が浮かびあがってくる。

(4) 親から見た子どもの姿

親から自分の子どもを見たとき、「思いやりがある」(20.9%)「非常に素直である」(15.5%)と高い数値がでた。

しかし、「根気強い」(6.7%)「わがままをおさえることができる」(4.1%)と低く、耐える力や欲求をおさえる力が極端に不足していることがわかる。今後このことを意識的なしつけとして学校・家庭でも強めていかなければならない事項となるのではないか。

8つの選択肢から2つを選ぶ設問に、1つも回答していない親もあり、調査票を前にして迷っている姿がうかがえる。

「よく手伝いする」(10.9%)とでてきているが、昭和53年の調査では、43.4%であったのでだいぶ低くなっている。

(5) 親が望む子ども像

親が望む子ども像として、「正しく判断できる子ども」(18.5%)「思いやりのある子ども」(18.3%)「素直な子ども」

(11.6%)とごく一般的なことがとりあげられてきている。これは、親から見た子どもに対する比率とほとんど一致する。

「根気強い子ども」(4.6%)「進んで勉強する子ども」(2.4%)と本校の生徒に欠けている事柄について、回答率は低いことが気にかかる。「進んで勉強する子ども

よく手伝いする	10.9	(%)
よく勉強する	5.4	
非常に素直である	15.5	
根気づよい	6.7	
物を大切にする	8.0	
思いやりがある	20.9	
がまん強い	6.5	
おまねをばいえることができる	4.1	
その他	22.0	(%)

素直な子ども	11.6
根気強い子ども	4.6
正しい判断のできる子ども	18.5
思いやりのある子ども	18.3
人に迷惑をあたない子ども	12.4
挨拶がきちんとできる子ども	5.4
責任感の強い子ども	11.9
物を大切にすることも	3.1
進んで勉強する子ども	2.4
つらいことには耐えることができる	10.2
無答	1.6

は、本校の教育目標の一番目にかかげられているが、親の意識は低く学校との間に大きな隔りがある。

(6) 子育てについての不安や悩み
子育てについて、不安や悩みを抱えている家庭が半数をこえている。

悩みの第一は「子どもとふれあう時間が少ないこと」(37.0%)である。

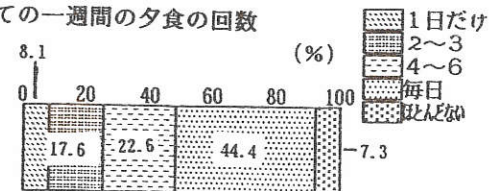
本調査の回答者の86.4%は父親であるが、「子育てに自信が持てない」、「子どもが親の言うことを聞かない」があわせて25.6%にもなるのは気になる数値である。

(7) 子どもに対する不安や悩み
中学生を持つ親が、子育ての中ではもっとも不安や悩みに感じていることは、「進路について」ついで「勉強について」である。高学歴志向の中で親として当然の悩みであろう。

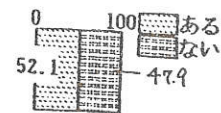
つづいて「子どもの性格」で、子ども同志の友人関係や子どもの行動くわえて健康については、おおかたの家庭ではそう悩んでいない。

学年が進むにつれて、すべての項目について悩みの度合いが高くなっていく。特に、進路については1年(55.3%)2年(64.2%)3年(77.5%)と顕著である。

(8) 家族そろっての一週間の夕食の回数



一家がそろって食卓を囲む夕食時は、家族の団欒の場である。また、家族とのふれあいを通して、子どもの人間形成に影響する無意図的な教育機能の働く場である。



悩みや不安の内容 (%)

子どもの育て方に自信が持てない	13.3
子どもの気持ちがわからないこと	12.8
子育てについて家族内で意見が合わないこと	6.6
子どもとふれあう時間が少ないこと	37.0
子どもが言うことを聞かないこと	12.3
その他	18.0

(%)

	全学年	1年	2年	3年
健康について	23.9	21.4	23.9	26.0
勉強について	59.4	63.4	59.7	55.8
性格について	34.9	33.9	33.6	38.1
行動について	22.4	16.1	25.4	24.6
友人関係について	15.9	16.1	13.4	18.1
進路について	66.4	55.4	64.2	77.5

家族そろって食事をとる家庭が、半数以下(44.4%)にとどまっており、週3日以下の家庭が33.0%にものぼっている。「1日だけ」(8.1%)「ほとんどない」(7.3%)という家庭もある。

(9) 子どもの進路についての親の考え

「高校までは進ませたい」(42.2%)に対して、「専門学校または短期大学」あるいは「できるなら大学に進ませたい」(52.9%)と非常に高い比率を示している。

昭和53年の調査では、大学進学を望む親は(27.9%)と低く、10年の間に進学に対する意識は大きく

変化し、高学歴を志向する親が多くなったことがわかる。

この調査で、「今のところはっきりした考えを持っていない」が、わずかではあるが3年生の親にもいることは気がかりである。

(%)		昭和53年度の調査	
中学校を卒業したら就職させたい	0	各種学校	4.6
各種学校(職業訓練校など)に進ませたい	2.6	高等学校	67.4
高校に進ませたい	42.2	短期大学	10.7
専門学校または短期大学に進学させたい	14.1	大学	17.2
出来るなら大学に進学させたい	38.8		
今のところはっきりした考えを持っていない	2.3		

(10) 進路について親子の意見が対立したときの結論の出し方 (%)

進路に関して、親子に違いが生じたとき親はアドバイスをを行い、子どもの考えをまず第一にしたいとする回答が73.3%であった。

1・2年生と3年生の親では結論の出し方がすこし違っている。

3年生の親になると「親がアドバイスを与えるようにする」というのは減って、「子どもの考えにまかせる」「どうしたらよいかわからない」がふえてい

親の考えを押し通す	0.5
子どもがよく話し合えば最後は親の考えに決まる	8.3
子どもの考えを大切に親はアドバイスを与えるだけ	73.3
子どもの考えに決まる	5.2
学校の先生に相談するだけ	7.5
どうしたらよいかわからない	5.2

	1年	2年	3年
押し通す	0%	0.7%	0.7%
したがわせる	10.8	4.5	9.9
アドバイス	76.6	76.9	67.6
まかせる	2.7	4.5	7.7
相談する	5.4	8.2	8.5
わからない	4.5	5.2	5.6

3. 調査結果から見られる問題点と課題

調査によって、家庭教育の現状と親の意識を明らかにすることができた。そこで浮かびあがってきた生徒指導を進めていくうえでの問題点を明らかにし課題を把握したい。

(1) 子育ての役割を祖母が担ってきた家庭が多いこと

調査結果から、職業を持たない母親はわずか5.0%にとどまり、共稼ぎ家庭が86.5%、子育てを祖母に依存してきた家庭が半数近くにのぼることが明らかになった。

子どもの成長にもっとも大きな影響を与える幼児期に、本来育児の補助者であるべき祖父母が両親にかかわって実質責任者の役目を担ってきたことになる。祖父母の責任の重大さとともに、その自覚があるか疑問である。また、過保護や親の放任の心配もある。

このような家庭の状況の中で、朝食抜きで登校する等の家庭での食生活、基本的な生活習慣が身につけていない、保健衛生面での意識が十分でないなど集団生活を営むうえで問題になることが少なくない。

これらの問題は、統合以来学校がかかえこんできたわけである。これからは家庭教育の充実に向けて、町の教育委員会や家庭教育の推進に関する諸機関と連携をとりながら積極的にとりくみを行っていく必要があるのではないかと。

(2) 子育てに父親の手がかけられることが少ないこと

子育ての悩みの中で、「親と子のふれあいの時間が不足している」と多くの回答が寄せられている。父親が子育てにかかわっている家庭はきわめて少なくその多くは祖母と母親である。しかも、就業している母親が多く、子どものしつけまで時間的に無理なことがうかがわれる。

家庭生活の中で、父母それぞれが持つ子育ての機能が活かされて、子どものしつけが行われてこそ、自律的な生活を送ることが出来るものと思う。しかし、子育てに父親がかかわる部分がきわめて少ないことなどにより、「しつけ」はおろそかにされ、甘やかされた節度のない毎日のくらしの延長を、そのまま学校生活に持ち込んでいる実態がある。このように、家庭における父母の基本的なしつけの弱さは、学校での生徒指導の面にも問題を呈している。

学校からも家庭教育の大事さを呼びかけていくとともに、家庭の教育機能の向上にむけた内容をPTAの研修の中に組み入れていくような十分な配慮がなされなければならないのではないかと。

- (3) 「どんな子どもに育てたいか」について、学校と父母との間に意識の違いが見られること

親から見た子どもの姿は「素直であり、思いやりのある子ども」である。親が望む子ども像としてもっとも比率が高かったのは、「正しく判断できる子ども」である。これは、本校の生徒指導の目標と一致する。つぎに「思いやりのある子ども」「人に迷惑をかけない子ども」とつづく。家庭での徳育を重視する傾向は、昭和53年に実施した朝日町教育指針策定のための調査結果とほとんど同じである。しかし、「根気強い子ども」「物を大切にできる子ども」「つらいことに耐えることができる子ども」など、本校の生徒指導上大事にしたいことがらについては低い数値となった。

将来を一人で生きぬいていくために基礎となる学力、耐える力、根気強さなどを養っていくことに学校と家庭との間に意識の違いが見られる。

学校としても、このことを意識して教育活動の見直しを行ない、そのような力をつける場面を設定していかなければならないのではないかと。また、学校と家庭がどのような力を子どもにつけてやる必要があるのかについて、共通理解をはかっていく場を設定し取り組んでいかなければならないと思う。

- (4) 子育てについて不安や悩みをかかえている家庭が半数をこえること

子育てについて、不安や悩みをかかえている家庭が半数をこえている。

悩みの第一に、「子どもとふれあう時間が少ないこと」をあげている。本調査の回答者の86.2%は父親である。「子育てに自信がない」「子どもの気持ちがわからない」「子どもが言うことを聞かない」と子どもの養育に自信が持てない回答がかえってきている。

中学生の発達段階の特性として、情緒の不安定、自己中心的な傾向などがあげられる。親の方はこの時期の子どもの心を充分理解できず、また、多様化した価値観に対応が難しくして親として子どもにどのような態度で接していけばよいのかとまどっている様子がうかがえる。

親も子どもも不安定な状態の中で、お互いが理解しあえず心の交流がはかられないまま、子どもの側からは不信や反発を招くような危険な要因にもなりかねない。学校がかかえている生徒指導上のさまざまな問題も、このような家庭の状態からおこってくることも少なくない。

このようなことから、生徒個々の問題について学校と家庭が緊密な連絡をとるのはもちろんのこと、子育ての悩みや問題について語り合い、父親と母親の役割を再認識して子育てのあり方を学んでいく研修会などを組織して行く必要があるのではないかと。

- (5) 親と子のふれあいの時間が不足していること

家族の中で、だれが子育ての中心になってきているかを小学校入学前、小学

校、そして中学校と大きく三つの期間に区切ってたずねた。小学校入学前では、母親(41.7%)を祖母(54.5%)がしのいでいた。小学校期になると母親と祖母が同数くらいになり、中学校期になると母親に子育ての中心が移ってきている。学年が進むにしたがって、父親の出番はふえてきているものの祖母と母親の比較ではない。

家族そろって一週間に夕食をとる回数をたずねたところ、「毎日」(44.4%)「1日だけ」(2~3日)はあわせて25.7%、「ほとんどない」は7.3%もあった。この調査と並行して食事調査を実施してもらった。それによると一緒に食事を取れない理由の第一として生徒は「家の人が忙しいから」(56.8%)をあげている。

総理府調査「一週間に家族そろって夕食をとる頻度」によると、「ほとんどない」家庭は6.2%である。これからみても、親子がふれあう場が一日の中にとれない家庭が多いことがうかがえる。

親と子の心の交流が生徒の心の安定につながり、明るく充実した学校生活を送る基盤になるものと思う。親と子がふれあう場とか共に作業できる場づくりを、これまでの学校の教育活動を見直して設定して行かなければならないのではないかと。それと同時に、このような現実には子どもがどう対応していくのか、子どもの自己確立をめざす指導も大切となるだろう。

- (6) 子どもの進路について悩んでいる親が多いこと

子どもの進路について、「高校までは進ませたい」が42.2%、そして「専門学校または短期大学まで」と「できるなら大学に進ませたい」を加えると、52.9%にもなり、高学歴志向が10年前の27.9%とは大きく変わっている。子どもに対する親の不安や悩みの中で、もっとも多いのが「進路について」で全体では66.4%である。1年(55.4%)2年(64.2%)3年生(77.5%)で、学年が進むにつれてその数が増えていく。生徒に対して実施した調査の結果も同様であった。

しかし、子どもと一緒にいるときの話題として、子どもの進路に関する話し合いは少ない。「将来に関すること」についてはわずか4.6%である。進路について親子の意見が対立したときの結論の出し方として、その多くは「子どもの考えを大切に親はアドバイスをする」と答えている。しかし、将来の居住地の選択とのかかわりから、いっそう難しさがましてくるものと思われる。また町の立地条件等から職種が限定され就労の場も限られていることや、子どもの教育資金とのかかわりもあって、自信のあるアドバイスをするのが困難な状況にあるのではないかと。

こういった親の考えは、生徒の進路意識にも影響を与え将来へのめあてをもちにいない生徒も少なくない。

こういった地域の特殊性をも十分とらえた進路指導を行っていかねば

ならないのではないかな。

4. 連携の具体的方策

(1) 授業参観を通して

—— 授業参観を学校と家庭とのより密接な協力・相互理解の場にする ——

調査によって「めざす子ども像」について、学校と家庭との間に意識の違いが見られた。学校と家庭との間に、ものの見方や考え方に違いがあるのは当然である。しかし、このくい違いが学校と家庭との信頼関係をはばむ要因、生徒指導を進めていくうえでの障害にもなりその効果が薄れてくる。

これまでは、PTA総会・各種懇談会・諸通信によって学校理解や協力を呼びかけている。しかし、それは学校側からの一方的な協力要請でしかなかったのではないだろうか。

保護者に学校教育を理解してもらい、学校と家庭が相互理解を深めながら連携をとりあう場として、授業参観の見直しを考えたい。

本校では授業参観日を、学年始めの4月、1学期末の7月、2学期末の12月と3回設けている。他の学区と異なっているところは、そのうちの1回は日曜日に実施していることである。これは、統合当時から町の労働対策協議会との申し合せ事項（職を持つ母親が多いので企業の能率をはかるため）によるものである。

年3回の参観日には、ほとんどの保護者が出席する。有効に活用して次のような場にしなければならないのではないかな。

・家庭での子どもの対応のしかた（ほめ方、はげまし方、しかり方）がわかる。

・学校や担任の教育方針がわかる。

・学級担任と保護者、そして子どもの人間関係を深めるきっかけをつくる。

そのためには、学校から保護者に理解してほしい内容や希望を的確にもりこむ。そのあとの懇談会では、そのことについて意見を交換する、また学校に対する要望を聞くなどこれまでとは違った創意工夫をし、授業参観日を「学校と家庭をつなぐ」大きな役割と意義をもつものにしなければならないと思う。

そうすることによって、学校が今課題として取り組んでいることや諸活動について家庭の理解や協力を得ることができるのではないかな。また、懇談会では家庭がかかえている問題などをも出していくことから、家庭で親としての役割や子どもへの対応のしかたがわかり教育効果を高めることができるであろう。

このためには、年度始めにしっかりした計画を組んで実施することが必要となるのではないかな。

次にその試案を提示したい。

○授業参観日の年間計画

	授業参観	学年、学級懇談会
4月	学校、学年経営方針にそった学級担任の授業。特に学習や進路にかかわる題材をとりあげた学級活動	それぞれ、授業について話し合った後、家庭で親としてどうすべきか意見を交換しあう場を設定する。 父母がかかえている悩み、学校に対する要望などもだしてもらう。 そのあと 1年 生徒理解とともに、学校生活全般にわたって理解を求め父母の協力を要請する。
7月	1年 「中学校での勉強のしかたを学ぼう」 2年 「学習方法の見直しと改善」 3年 「卒業生の進路」	2年 学年目標・年間計画を提示し父母への要望をもふくめた実践計画に理解を求める。 3年 義務教育終了にとどまらず、進路決定を行う年であることを確認し協力態勢を求める。
12月	長期休業中の生活のリズム確立のため、各学年とも「夏休みの生活設計」という題材で親も参加する学級活動	夏休みの過ごし方について、意見を交換する場を設定する。 そのあと 1年 学校生活に慣れたか、不適応などところはないか細かにチェックする。 2年 中学生時代というものを正しく理解し対応しているか確かめる。 3年 進路決定にむけて、家庭の理解とバックアップ態勢ができてきているか確かめる。
	各学年とも生徒が活躍する姿を見せる教科の授業	1 2年は授業中の生徒の姿について、感想や意見を交換しあう場を設定する。3年は生徒の成長を親と確認しあう。 そのあと 1年 中学生としての自覚が安定するこの時期「子どもを知る」を中心に保護者の対応のあり方を考えさせる。 2年 親と子のずれや、親には見えにくい子どもの姿を中心に保護者の理解を促す。 3年は進路決定時における親のあり方、進路選択、決定に関する種々の手続きについて理解させる。

その他 9月の運動会、10月の学校祭では、生徒一人ひとりが活動する姿を見てもらい、その成長を知ってもらう。

活動内容	指導上の留意点
1. 「今年の夏休みをどう過ごすか」について班の代表が発表する。	・ 事前に作文させておき、意欲を喚起する内容のものを発表させる。 (自己存在感)
2. 班で作成したモデルプランを発表し、夏休みの計画にふさわしい内容であるかどうか話し合う。	・ 前時に、班ごとにモデルプランを作成させる。その中から、二つのタイプを選び発表させる。
(1) 二つの班が発表する。	・ なぜ、その内容にしたのか。あるいは、実践の見通しなどを説明させる。
(2) 発表されたモデルプランの内容について話し合う。	・ 一学期の反省は生かされているのか。計画の調和と実践の見通しについて考えているかの観点で話し合いをさせる。
3. 「夏休みの生活」に努力目標を書いたあと、モデルプランを参考にしながら、夏休みの計画を作成する。	・ 親がわが子のそばに座り、計画作成の助言ができるようにする。 (共感的人間関係) ・ 計画の中に入れる内容として、次のものはおさえたい。
	・ 学習の予定(宿題、不得意科目の復習) ・ 家の手伝い ・ 病気の治療 ・ 地区行事、部活動の予定 ・ 家族との予定 (自己決定の場)
4. 実践の決意を述べる。	・ 男女各一名ずつに実践の決意を述べさせる。 (自己決定の場)
5. 教師の話聞く。	・ 作成した「生活プラン」は、「夏休みの生活」とともに家に持ち帰り、見えるところに貼っておき実践すること。また、自己評価を行い休みあけには親のコメントをもらって提出するように指導する。

このような授業をくむことによって

- ・ とかく生活のリズムが乱れがちになる子どもの「夏休みの過ごし方」について、親としてどう援助したらよいか具体的手立てがわかる。
- ・ 夏休みの生活の指導を、家庭で責任をもってすることができる。
- ・ 生徒にとっても、夏休みの実践課題が明確になりめあてをもって行動できる。
- ・ 親と子の交流だけでなく、親どうしの交流もはかることができる。
- ・ 町の生徒指導連絡協議会で作成した「夏休みの生活」を有効に活用できる。

(2) 進路学習を通して

—— 学校と家庭との連携による生き方を考えさせる進路学習を行う ——

子どもの進路に不安や悩みをかかえる家庭が、学年を追うごとに増していること。子どもの進路選択にさいして適切なアドバイスをしたいと願っているが、3年生の進路決定という段階にきて、どうしたらよいかわからない親がいることが調査によってわかった。また、同時期に実施した生徒の悩み調査によると「だいぶ悩んでいるのは、1・2年が「勉強のこと」、3年になると「進路について」が圧倒的であった。

3年生になると、進路決定という重大な岐路にさしかかる。しかし、親の中学生時代とはまったく違う社会、進路先の多様化、親と子の価値観の違い、ふだんの親と子のふれあいの不足などにより、適切なアドバイスができるか疑問である。

これまでの指導をふりかえってみると「進路の選択」にかかわることで、卒業学年を中心に進路情報の提供に重きをおいてきたようである。そのため、3年生になっても進路の目標が定まらず学習意欲に欠ける生徒、将来の展望がもてずにげやりの生活に陥りがちな生徒、また、わが子の進路決定時に「先生が決めてください」という保護者もいた。

このようなことをも考えたとき、家庭に対しては的確な進路情報を提供するとともに親の進路学習会を組織すること。それとともに、生徒たちが自分の能力や適性を知り、将来どんな職業をもって社会に貢献していくのか、特に生き方にかかわる進路学習を学校と家庭が連携を深めながら進めていくことが必要であると思う。

ここに、学校と家庭の連携そして地域、さらには進路学習に親と子の交流を深める場の設定をも含めた次のような進路学習を考えてみた。

- ①進路に関して、親と子が語り合える素材や場を提供して、それをもとにした進路指導の授業を組む。それを、進路指導年間計画にもりこむ。
- ②学年行事に「親の姿から子どもが学ぶ進路学習会」を設定する。
- ③PTA環境整備部主催の奉仕作業を、子どもが親から学ぶ勤労体験活動の場に改める。
- ④PTAの学年研修活動として、父親を対象にした「進路学習会」を開催する。
- ⑤生徒会行事の学校祭のとき、地域学習を組むことによって地域やそこに働く人たちの様子を知る機会を設定する。
- ⑥町教育委員会と共催して、3年生を対象にした「ふるさと学習会」を開催する。

以上のような「進路学習」を進めることにより、生徒は

- ・ 進路に対する意識や関心が高まる。

- ・望ましい職業観を形成することができる。
- ・自分の生きがい、人間らしい生き方はどのようなものであるかなどについて考えることができる。
- ・将来のめあてを持ち、自己実現にむけて意欲的に行動できるようになる。

父母は

- ・的確な情報の提供で、連携も密になり進路に対する関心も深まる。
- ・子どもの進路に対して、適切なアドバイスができる。
- ・子どもの生き方にかかわることで親と子の対話が持てる。

○ 学校、家庭、地域の連携を考えた進路学習の構想

学級活動 「進路についての 親と子の対話」	学年行事 「親から学ぶ進路」	PTAの行事 「親と子の体験活動」	PTAの研修活動 「進路学習会」	地域学習 「ふるさとを知る」
8月 「身近な人の仕事」 2月 「父母の歴史年表」	1月 「親の人生を聞く会」 父母の人生を知る	11月 「雪隠い作業」	8月 「子どもの進路と 親のあり方」	10月 学校祭 「地域学習」
8月 「親からの 聞き書き活動」 1月 「生い立ちの記」	2月 「親の仕事を知る会」 親の仕事を知る	4月 「シバザクラ植え」 1月 「除雪作業」	3月 「望ましい進路希望 とその育て方」	10月 学校祭 「地域学習」
6月 「自分をよりよく 知ろう」 12月 「進路に対する 親の願い」	8月 「親の労働に学ぶ」 職場体験学習	7月 「学校林下刈り作業」	6月 「進路選択のための 各種情報」 10月 「進路決定にむけて」	8月 「ふるさと学習会」 (地域の企業巡り) 10月 学校祭 「地域学習」

(3) 社会教育団体との連携を通して

——町が主催する家庭教育学級との連携により、家庭教育の充実をはかる——

職を持つ母親が95%もあり、子育て期の母親の就労する割合が高くなってきている。全国平均から群を抜く三世代家族も特徴的なことからである。

そのため、母親がわりに祖母が子育ての中心にならざるをえないことから、基本的な生活習慣の育成やしつけの面で問題があることが調査からでてきている。

調査から実態をもう一つ述べると、家族そろって夕食をとる家庭は半数にも満たない状況があり、週に3日以下の家庭が3割以上にもおよんでいる。

家庭教育は、親と子のふれあいを通して、生活習慣の形成や望ましい心情や態度を養うところに特質があるといわれている。このような家庭の現状の中で、その特質を十分に発揮できるかが問題である。

山形県教育振興計画で、家庭における教育機能の充実強化が急務であり、子どもの発達段階に対応した内容を取り入れた家庭教育学級の拡充を、学校と地域が連携を取りあっていっそう進めて行く必要があることを指摘している。

本校でも、さきに述べたような実態をふまえ、家庭教育の充実にむけて新たなとりくみを考え、両者の相互補完によって子どもの育成がよりたしかなものになっていくことに目をむけなければならないだろう。

町でも、各地区公民館が保育所との連携のもとに家庭教育学級を組織している。しかし、乳幼児を対象にしたものが多くこれまで中学校とのつながりはなかったといえよう。これからは、家庭教育学級のプログラム作成段階で社会教育担当者と連携を取り、教師も積極的に推進の役割を担っていかなければならないのではないかと

具体的には、子どもの領域から「基本的生活習慣としつけ」心身の発達との関連で「子どもの健康と食生活」「子育てにおける母親の役割」など、その内容は多岐にわたるが、実態を把握している教師がその資料を提示していくことが考えられる。次に、そのとりくみの試案を提示したい。

○ 家庭教育学級案

講師
問題提起者
司会

校医
養護教諭
社会教育担当者

1. 学習内容 「子どもの健康と食生活」

2. ねらい

子どもの望ましい成長のために、正しい食生活の習慣を身につけさせることの大切さを理解してもらう。

3. 学習過程

学習内容	留意点	資料
1. 食事調査の結果から、朝食ぬきの生徒が多いこと。食生活の調査結果から本校生の食事の摂取状況を知る。	・資料をもとに、朝食抜きの生徒が2割にも達していること。また、曜日別食事摂取状況を知らせ、半数近くの生徒が心配な食生活をしている実態を提示する。 朝食 パン、牛乳、ヨーヨー 昼 パン、牛乳 夜 ラーメン	資料1 食事調査の結果
2. 朝食ぬきの原因について話し合う。	・各自子どもの家庭での生活をふりかえり、考えたことを自由な雰囲気でも話せるように配慮する。	資料2 食事内容調査
3. 欠食が学校生活にどんな影響を与えているか知る。	・精神、神経のイライラ、無気力になりやすいなどから、学業生活にも大きな影響を与えていることを具体的な事例をあげて報告する。	
4. 家庭での子どもたちの食生活の実態を出し合う。	・それぞれの家庭で、子どもたちの食生活がどうなっているのか。問題がないのかなどについて出し合うようにする。	
5. 食生活と子どもの成長とのかかわりについて知る。	・食事の摂取量が不足すると、子どもの成長に大きな影響を与えることを医学的な根拠に基づいて説明する。 ・(校医)	
6. 正しい食生活の習慣を身につけさせるために、親としてどのようなことに配慮しなければならないかについて話し合う。	・具体的な方策を話し合い、各家庭が実践できるようにする。 ・きょうの学習の要点と助言を校医からしてもらう。	

V. まとめと今後の課題

これまで、同一校に長く勤務していて、地域や生徒の家庭のことについてわかったつもりでいたが、調査によって十分把握していなかったことを知らされた。

地域や家庭の急激な変貌、そこから起こった家庭の教育機能の低下、価値観の多様化、それに対応する生徒指導の必要性が痛感された。

生徒指導は、「一人ひとりの生徒を大切にするとともに、将来社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助である」とおさえ、個々の生徒の自己指導力の育成を教育活動全般にわたって意図的計画的に実践していかなければならない。また、教育活動の見直しを含めて、学校外の教育にも目をむけ家庭の教育機能を高めていくために学校が啓発の役割を担っていかなければならない。

生徒指導の充実をめざすために、学校と家庭・地域とが連携を深めていかなければならないこと、手を結んでいくべきいくつかの視点を定めることができた。それをもとに、学校としてはこんなとりくみや手だてが必要なのではないか。このようにしていけば、実践も可能になるのではないかと考えられる次のような連携の具体的なとりくみの試案を作成した。

- (1) 授業参観についての見直し
- (2) 学校と家庭・地域との連携に立った進路指導
- (3) 家庭教育学級との連携

地域と家庭と学校が連携して生徒指導を推進しなければならない事柄はもっとあるが、以上を手がかりにして広めていかなければならない。この研究を実践にどう生かしていくかと同時に、校内における生徒指導の充実をめざすことが今後の課題である。

VI. おわりに

最後になりましたが、6ヶ月もの長期にわたってご指導くださいました県教育センターの先生方に厚くお礼を申し上げます。担当の堀清一先生と高橋信敬先生には殊更お世話になりました。ありがとうございました。

また、本研修の機会を与えてくださいました関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成元年度

山形県教育センター

長期研修（後期）

研究報告書

中学校歴史的分野における 資料作成と活用の工夫

—— 生徒の課題意識を高めるために ——

山形市立第七中学校教諭

田 口 和 典

目次	
I、はじめに	1
II、研究のねらい	1
III、研究の仮説	1
IV、研究の方法	1
V、研究の内容	
1、生徒を対象とした社会科の学習に関する実態調査から	1
2、課題意識を高める資料の要件	2
3、指導過程への位置づけ	2
4、検証と考察	7
V、研究のまとめと課題	10
VI、おわりに	10

主な参考文献

- ・文部省「中学校指導要領」明治図書・平成元年
- ・文部省「中学校指導書 社会科編」・大日本図書・平成元年
- ・山形県教育センター「動機づけを重視した授業の研究(3)」研究報告書第16号 1981年
- ・石田恒好「授業の準備の改善」『授業改革事典 第3巻 授業の実践』第一法規 昭和57年4月
- ・有田和正「固定概念をひっくり返し目を開く資料」『教育科学 社会科教育 NO 262』明治図書・1984年
- ・田中和徳「主体的な思考を促す資料の活用法・導入時に提示する資料について」『新潟市立総合教育センター 研究収録』1988年
- ・永井学「課題意識をもって意欲的にとりくむ社会科・単元構成と課題追求の工夫を通して」『新潟市立総合教育センター 研究収録』1988年
- ・大阪府科学教育センター「社会科の授業改善に関する研究II」研究報告収録・昭和60年
- ・那覇市立教育研究所「社会科学習に関する実態調査」紀要122号・昭和57年
- ・石山忠造「社会科における思考過程の実践的指導」日本図書文化協会・1981年
- ・石田耕吾「社会科・学習資料の収集と活用」明治図書・1971年
- ・「20世紀全記録」講談社・昭和62年
- ・「世界の歴史 第14巻 第1次世界大戦後の世界」中央公論社・昭和60年
- ・「世界史資料」東京法令出版・昭和52年
- ・「アトラス現代史1」創元社・1988年
- ・「山形県版 新版 中学歴史年表・資料」山形県社会科研究会編纂・山形教育用品 1988年

I、はじめに

社会科は、抽象的な思考や観念的な操作のみで知識や理解を得させる教科ではなく、社会事象に直面しそこから問題を把握し、事実即して概念を組み立てながら社会認識を育てていくことをねらいとする教科である。したがって授業の中に、事実を持ち込む手段として資料を活用することになる。このような資料の扱い方も含めて、私自身が授業で抱えている課題に次のようなものがある。

生徒が身につけるべき「知識」や「理解」の量が非常に多く、ともすれば教える側の論理を優先させてしまっている。そのため、生徒の生き生きとした活動の無い、講義中心の授業が多い。資料の活用に関して言えば、網羅的な提示とその解説にはしり、生徒が消化不良を起こしている。したがって事実に基づいて社会認識を育てていくという資料活用の本来の目的から程遠い現状である。生徒の中に社会科嫌いの多いことも、私自身の指導に原因の大半があるように思われる。

以上のような理由から、生徒の課題意識を高め、自ら学びとろうとする意欲を喚起する資料の作成と、活用はどうあればよいかを、この機会に研修してみることにした。

II、研究のねらい

- 1、生徒の課題意識を高める資料の要件をさぐり、資料作成の視点を明確にする。
- 2、単元「第1次世界大戦」において、課題意識を高める資料を作成し、その活用を指導計画のなかに位置づける。

III、研究の仮説

1単位時間の課題把握の場面で、生徒の思考の流れに即した資料を作成し活用をすれば、生徒の課題意識を高めることができるであろう。

IV、研究の方法

- 1、生徒を対象とした社会科の学習に関する実態調査によって生徒の社会科に対する意識を把握するとともに主題の妥当性を確かめる。
- 2、資料に関わる先行研究の成果と問題点をさぐり、課題意識を高める資料の要件を明らかにする。
- 3、仮説に基づき、授業によって検証し、仮説の妥当性と今後の課題を明らかにする。

V、研究の内容

- 1、生徒を対象とした社会科の学習に関する実態調査から

(1) 調査の実施

生徒の意識を把握することにより、学習指導上の問題点を明らかにして授業改善の視点を得るとともに、研究主題を吟味しその妥当性を探ることを目的に、2年生193名を対象に実態調査をおこなった。

(2) 調査結果

要点をまとめると以下になる。

- ①生徒は9教科の中で社会科をどうとらえているか。
ア、他の教科との比較では社会科を「楽しくない」(25%)「分かりにくい」(25%)教科ととらえ、認知面と情意面には強い相関が見られた。
- ②生徒が社会科を嫌うとすればその原因は何か。また好きだとすればその理由は何か。
ア、生徒は嫌いの主な原因として「学習の仕方がわからないとき」(23%)「学習の内容が面白くないとき」(20%)「先生の講義や説明だけのとき」(17%)をあげている。
イ、生徒が社会科を好きになるのは「学習する内容が面白いとき」(29%)「興味をもてる資料があるとき」(21%)「成績が良いとき」(21%)である。
- ③生徒は社会科の指導の方法や内容についてどのように思っているか。
ア、学習過程の中で生徒がやる気をおこすのは、「今日の学習の課題がわかったとき」(31%)「まとめをするとき」(31%)「ミニテストをするとき」(24%)であった。
イ、生徒が授業にもっと取り入れて欲しいと思っている学習の仕方は「OHP、スライ

この調査結果からも、主題は授業改善の重要な手がかりになりうると判断した。

社会科では、生徒の社会認識を育てるために、社会現象の中から課題を見つけて、それを解決していく学習過程を重視している。したがって、1単位時間の学習を「課題把握」「予想」「検証」「まとめ」という過程で進める場合が多い。課題意識とは、基本的には、このような学習過程を通して課題を解決していくとする生徒の心の動きととらえることができる。この中で、特に課題把握場面は、その後の生徒の継続的な課題意識を左右するという意味で重要である。そこで本研究では、課題把握場面に焦点をしばって考察を進めていきたい。

課題把握場面の生徒の思考は、その実態から三つの段階としてとらえることができる。次に示す「表1」は、これに即して授業改善の方法をまとめ、さらに生徒の思考を段階的に刺激し課題意識まで発展させていく資料の要件をまとめたものである。

表 1

課題把握の段階	生徒の思考の実態	授業改善のアプローチの方法	資料の要件
① 興味・関心をもつ段階	社会的事実や事象を感覚的な好みや情緒・好奇心の対象として、感覚的・表層的にとらえる段階にとどまっている。	ア、授業で用いる資料を、生徒の五感にうったえるものなどに改善して、好奇心を喚起する。	・感覚的にとらえやすい実物や映像などの具体的資料であること。 ・生徒の好みや情緒、好奇心などを刺激する資料であること。
② 疑問をもつ段階	社会的事実や事象を自分の既有体験にてらしあわせて、疑問をもつ段階にとどまっている。	ア、資料の読解力を高めるために、単元を通して段階的な指導をはかる。 イ、授業で活用する資料を、生徒にとって驚きや疑問のもてるものに改善していく。	・生徒の既有体験や、興味関心をひく資料との間に概念的コンフリクトを起こさせるものであること。
③ 課題をつかむ段階	疑問を、社会的な関係でとらえなおし、解決しなければならない課題としてとらえる段階であるが、社会的な関係や歴史的な見方でとらえる力が弱い。	ア、社会的思考力を高める視点から、単元の構成を系統的なものに改善していく。 イ、生徒の疑問を、社会的な見方に発展させるように授業を構成し、そのための資料を作成・活用する。	・生徒のもった疑問を、社会的関係や、歴史的見方に置き換え、学習課題に結び付けられるものであること。

前述の資料の要件にしたがって、単元「第1次世界大戦」における資料の作成をおこなった。目標分析と具体的資料名は、3頁～4頁の「表2」「表3」に示す。

なお、第1教時の指導案を5頁の「表4」に、第4教時の指導案を6頁の「表5」に示す。

単元「第1次世界大戦」 目標分析と資料の位置づけ (「新訂 中学校社会 歴史的分野」 教育出版)		到達目標	到達基準	時数	学習過程における活用資料。【例】は興味、関心をよく資料。【疑問】は疑問をもたせる資料。【課題】は課題をつくり出す資料。○は例題、□はまともで用いる資料。
主姓名 例＝学習課題 ＝基本的学習項目	到達目標	到達基準	時数	学習過程における活用資料。【例】は興味、関心をよく資料。【疑問】は疑問をもたせる資料。【課題】は課題をつくり出す資料。○は例題、□はまともで用いる資料。	NO.1
1. 第1次世界大戦のお	1. 第1次世界大戦前の世界情勢を帝国主義列強国の他民族や勢力範囲をめぐる対立の相点からとらえ、対立の中心がイギリスとドイツであったこと、各国間の同盟関係が生じたことなどを指摘できることともに、大戦のおこり方をサラエボ事件としておしえて、この大戦が史上初の世界規模の戦争であることなどを指摘できる。	①日露戦争後、ヨーロッパでは帝国主義国の対立が強まり、ドイツはオーストリア、イタリアと三国同盟を結び、イギリスはフランス、ロシアと三国協定を結び対立したことを指摘できる。 ②バルカン半島でスラヴ族の独立した、ロシアとセルビアの対立が激化し、この対立がヨーロッパの対立に発展したことを指摘できる。 ③1914年、オーストリアの皇太子がセルビアのサラエボでセルビアの青年に殺された事件から、それぞれの国を支援する同盟国と協商国(連合国)との間で第1次世界大戦がはじまったことを指摘できる。	1	【興味】スライド、写真「オーストリア皇太子の暗殺」 【疑問】T.P.、地図「世界大戦の経緯」 【課題】T.P.、地図「ヨーロッパの民族分布」 ○プリント、地図「三国同盟・三国協定」 ○プリント、地図「1910年前後のヨーロッパ各国の工業生産増進、植民地面積の増加、東欧露の増加」 ○T.P.、地図「ドイツ、イギリスの植民地と地産地消」 ○資料集、文章「ドイツ側からみた参戦の理由」	
2. 世界大戦の経過と日	2. 大戦は長期化し、総力戦、近代戦の様相を呈したことを指摘できるとともに、日本が大戦に参加した理由が中国への侵略にあったこと、中国に21か条の要求を認めさせたこと、これに対して中国では非日運動が高まったこと、大戦の影響で日本は好景をむかえ、工業化が飛躍的に進むようになったため日本経済を支配するようになったことを指摘できる。	①大戦は総力戦、近代戦として航空機、戦車、潜水艦などが使用され、今までになく激戦を演出したことを指摘できる。 ②1915年、中国に対して21か条の要求をだし、中国におけるドイツの利益を得ること、南滿洲やモンゴルでの日本の利権の拡大を認めさせたことを指摘できる。 ③中国は、武力を背景とする日本の要求を、中国に対する侵略政策だと見て、日本の商品に対する不買運動などを起こしたことが指摘できる。 ④日本は第1次世界大戦中、連合国側になつて参戦し、軍需品の輸出やアジア市場の拡大から貿易が大幅に伸び、空前の好景をむかえたこと、工業化が進むなかで三井、三菱、住友、安田などの財閥が日本の経済を支配するようになったことが指摘できる。	1	【興味】スライド、写真「戦車、航空機、潜水艦、潜水艇の使用」 【疑問】プリント、文章「ドイツに対する宣戦布告文」 【課題】プリント、文章「臨時参戦における加藤高明の発言」 ○T.P.、地図「中国におけるドイツの勢力範囲」 ○プリント、文章「対露二十一年戦争」 ○プリント、グラフ「第1次世界大戦前後の日本の工業生産増進、貿易の拡大」 ○T.P.、グラフ「北地道の石炭生産に、開闢のしめる利便の変化」 ○教科書、絵「成金」	
3. ロシア革命	3. 皇帝の専制政治のなかで第1次世界大戦に参加したロシアでは、国民生活が窮乏なのはなぜだろう ①世界大戦とロシア革命のつながり ②ロシア革命のめざすソビエト政府の成立したこと、革命の広がりを防ぐことができなかったこと、革命の拡大とともに日本もシベリアに大軍を送るが失敗したことを指摘できる。	①第1次世界大戦でできた臨時政府は、レーニンを指導者とするソビエト(労働者・兵士・農民の代表者会議)によって1917年の十一月革命で倒されたことを指摘できる。 ②1918年、英米仏は革命の影響をおそれロシアに軍艦を送って革命に干渉したこと、また日本もシベリアへ大軍を送って勢力を拡大しようとしたこと、それぞれ失敗したことなどが指摘できる。 ③3月革命でできた臨時政府は、レーニンを指導者とするソビエト(労働者・兵士・農民の代表者会議)によって1917年の十一月革命で倒されたことを指摘できる。 ④1918年、英米仏は革命の影響をおそれロシアに軍艦を送って革命に干渉したこと、また日本もシベリアへ大軍を送って勢力を拡大しようとしたこと、それぞれ失敗したことなどが指摘できる。	1	【興味】スライド、写真「冬宮に突撃する赤衛軍」 【疑問】T.P.、グラフ「1900年前後のロシアの工業生産」 【課題】プリント、グラフ「1910年～1917年のロシアの革命」 ○プリント、文章「世界を席巻した10日間、J=リード」 ○プリント、表「臨時政府と、レーニン派の考え方の違い」 ○プリント、文章「アレクサンドル・フョードロフの脱走」 ○T.P.、地図「シベリア出兵」	

・主題名 ①＝学習課題 ②＝基本的事実事項	到達目標	到達基準	時 数	学習過程における活用資料、 ①＝例示、②＝関心を引 く資料、③＝疑問をもちたせる資料、④＝疑問は深 刻をつくる資料、⑤＝確認、⑥＝口頭とで用いる資料。
4. 第1次世界大戦後の 世界 (1) ①第1次世界大戦に負 けたドイツはどんなう たのたろう ②大戦の終り方 ③ベルサイユ条約	4. 連合国側は、アメリカの参戦によって 反響に結び、ドイツ国内の革命のなかで大 戦が終結したこと、ベルサイユ条約は戦勝 国が戦敗国の再分割をしたものであること が指摘できる。	①1918年1月、アメリカの大統領ウィルソンは、大戦による多 数の犠牲者が出たことをみて、14か条の平和原則を発表したこ とを指摘できる。 ②1918年1月、アメリカの参戦もあり、連合国は次々と同盟 国をふり、ドイツの兵の反乱もあって、連合国側で第1次 世界大戦が終結したことを指摘できる。 ③1919年、日本を含む27カ国の連合国の代表がパリに集まり 講和会議が開かれ、フランス、イギリス、アメリカが中心になっ てドイツの附てベルサイユ条約が結ばれたことが指摘できる。 ④ベルサイユ条約でドイツに對して、全ての領土と領土の一部の 放棄、軍備の制限、莫大な賠償金の支払いが課せられたことを指 摘できる。	1	【例示】スライド・写真「ドイツのインフレーション」 【疑問】プリント・写真「ドイツのインフレーション」 【確認】プリント・文章「ウィルソンの14か条」 【例示】プリント・文章「ベルサイユ条約」 口TP・地図「大戦後のドイツの領土地」
5. 第1次世界大戦後の 世界 (2) ①第1次世界大戦後の 世界は平和のためにど んな動きをしたのた らう ②国際連盟の成立 ③軍備縮小の動き ④民主主義の発展 ⑤大戦後の文化	5. 第1次世界大戦後の国際連盟の動きを 国際連盟の成立・目的・組織、4か国条約 9か国条約の締結から指摘できるとともに ドイツ・イギリスなどにみられる民主主義 の発展を指摘できる。	①1920年、42か国が参加して国際連盟が成立したが、アメリ カが参加せず、イギリス、フランスなどを中心に運営されたこと を指摘できる。 ②軍備縮小の努力として、英、米、仏、日の間で4か国条約が結ばれ たこと、さらに25か国条約が結ばれたこと、1930年にはロン ドン会議が開かれたことを指摘できる。 ③ドイツ共産党は、主権在民のワイマール憲法を定めて世界にさ まがけて20歳以上の男子に選挙権を与え、労働者の団結権を認 めたことを指摘できる。 ④イギリスでは1918年、一定の財産をもつ30歳以上の婦人に 選挙権が与えられたこと、また、1924年にはじめて労働党内 閣が成立したこと、1928年に男子の普通選挙が実現したこと を指摘できる。 ⑤大戦後欧米諸国では科学技術の発達が進み、自動車、ラジ オ、映画が普及したことによって文化の大衆化が進んだことが指 摘できる。	1	【例示】スライド・写真「戦後を畫ぶアメリカ兵」 【疑問】TP・地図「国際連盟の加盟国」 【確認】プリント・文章「国際連盟の目的文」 【例示】プリント・文章「国際連盟時代の社会議」 ○プリント・文章「ワイマール憲法」 口プリント・文章「パリ不戦条約」
6. アジアの民族運動 ①第1次世界大戦後の 殖民地ではどんな動き がおきたのたろう ②インドの民族運動 ③一統立運動 ④五・四運動	6. 第1次世界大戦とベルサイユ条約を契 機に、アジアの殖民地が民族の独立、開国 を求めて民族運動を興起させていったこと を、インド、朝鮮、中国の例から指摘で きる。	①第1次世界大戦中、イギリスは、インドに対して自治権を与える条 件で兵士を徴用したが実行せず、戦後ガンジー・ボールは、非暴 力、非暴力、不協定の運動を起こしてイギリスの支配に抵抗した ことを指摘できる。 ②日本の植民地主義とされてきた朝鮮では、1919年民族の自由と独 立を求めた三・一運動が起きたことを指摘できる。 ③中国でも1919年、日本の21か条の要求に反対して五・四運 動を起こしたことを指摘できる。 ④このころから、中国国民党をつくり革命運動をすすめたこと 1921年に中国共産党がつくられたこと、1927年、蒋介石 が国民党政府をつくったことを指摘できる。	1	【例示】スライド・写真「日本製品を食く中国人」 【疑問】プリント・文章「5・4運動の新聞記事」 【確認】TP・地図「大戦後の世界の民族運動の発生地 域」 ○プリント・文章「3・1運動の日新聞記事」 ○プリント・表「3・1運動参加数・発生件数」 口プリント・表「3・1運動発生地域」 ○TP・地図「3・1運動発生地域」 ○プリント・文章「1920年のガンジーの信念」 口プリント・文章「ガンジーに持つて聞かせる世界の歴史 (ネール)」

第1次世界大戦は帝国主義諸国の植民地をめぐる対立が、バルカン半島の民族問題をきっかけにしておきたものであることを指摘できる。

具 体 目 標	生徒の学習活動	指導の主な範囲・指示等
1. 第1次世界大戦の経緯のふしやねになったのはサラエボ事件であることを指摘できる。 2. サラエボ事件の背景には民族問題があったことを指摘できる。 3. 本時の課題がわかる。	・スライドを見て、何の事象か考える。 ・サラエボ事件の経緯を、つかむ。 ・TPから、バルカン半島の民族分布を学ぶ。 ・サラエボ事件の背景に民族問題があったことをつかむ。 ・本時の課題をつかむ。	●今日の学習は、第1次世界大戦の経緯のふしやねについて学習していきます。 ●スライドを見て下さい。○これは何の事象でした？ ウェン、逮捕、これは、1914年6月28日にオーストリア皇太子夫妻の暗殺された。この事件が全世界に戦争に繋がっています。セルビアという国の青年でした。TP1を見て下さい。○なぜオーストリアの皇太子夫妻が殺されたのでしょうか？ 本図をみた、悟らなさい。 ○TP2を見て下さい。 ○オーストリアとセルビアは同じ民族の国ですか？ 水通、オーストリアはゲルマンで、セルビアはスラヴだ。 ●オーストリアはスラヴ人の国であるがスニアを植民地にして、スラヴ人の反感をかっていました。今日の課題は、
	サラエボ事件が第1次世界大戦にまで広がったのはなぜだろう？	○どんなことが考えられるでしょう。 ○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。
	○どんなことが考えられるでしょう。 ○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。
	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。
	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。
	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。
	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。
	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。	○大戦の前には、ドイツ、オーストリア、イタリアが三国同盟、イギリス、フランス、ロシアが三国協約を結成し、対立していたことがわかる。

ようである。事後調査の「この時間の勉強は面白かったですか」の問いに対して、約9割の生徒が授業が「面白かった」と反応していることは、実態調査の結果と比較して評価できる。3枚のスライドの組み合わせが、生徒の好奇心を刺激し、特にスライド3が情緒的なものに働きかけることで、興味・関心をひくことができたと判断する。

「疑問を持たせる資料」として用いたTP1「第1次世界大戦の広がり」のねらいは、「一国の皇太子が暗殺された事件がなぜ全世界を巻き込む戦争に発展したのだろう」という疑問をもたせることである。TP1は生徒に疑問を起こすことができたと判断する。TP提示後、参考になるものを進んで探しているのはそのあらわれであると考えられる。

「課題をつかむ資料」としてTP2「ヨーロッパの民族分布」を用いた。ここでは、サラエボ事件を単なる暗殺事件から、民族問題という社会的関係からとらえさせて、本時の課題に結びつけていくことをねらった。事後調査の「この時間の勉強がわかりましたか」に対して8割の生徒が「わかった」としたこと、「わからなかった」とした生徒がいなかったことから、本時の学習課題は適度の困難度を持ち、生徒が学習課題をきちんととらえて学習を進めていったといえる。

抽出生徒の動きを見ても、スライド・TPに対してはよく集中しており、その後の学習活動も普段よりやる気をもって取り組んでいる。特に女子Aが、授業に積極的に参加し、挙手・発表してくれたことは、大きな成果である。なお抽出生徒は、ふたりとも事後調査で、「やる気がおきた」としている。

「やる気がおきた」生徒が6割に達したこと、「おきなかった」生徒がいなかったことは、実態調査の結果と比較すれば、本時の資料が生徒の課題意識を高めるのに有効であったと評価できる。

ミニテストの正答率からも、本時の到達目標はほぼ達成できたと考えられる。普段のミニテストよりも正答率が高く、知識・理解面にもプラス面の影響が認められる。特に、論述問題で約9割の生徒が正しく答えたことは予想以上の成果であった。

問題点として考えなければならないことは、「やる気がおきましたか」という問いに対して「普通」と答えた生徒が39%いたということである。原因として考えられるのは、TP1のひきおこした疑問（概念的コンフリクト）が弱かったのではないかということである。「暗殺事件が世界を巻き込む戦争になることはほとんどない」という意識が強ければ、「なぜ世界大戦にまで広がったのか」という疑問も強いものになる。第2回の検証授業では、強い概念的コンフリクトをおこさせるように、資料の提示の仕方を配慮しなければならないと考えた。

（4）第2回検証授業について

本時は第1次世界大戦の終結のようすと、戦後の世界の動きについて、ベルサイユ条約でドイツがどのような処分を受けたかを中心に学習を進めていった。

課題把握の場面で「興味関心をひく資料」としてスライド「ドイツのインフレーション」を、「疑問をもつ資料」として表「ドイツのインフレーション」を、「課題をつかむ資料」として「ウィルソンの14か条」を用いた。第1回の検証授業の反省から、資料提示の順を、プリント・年表「大戦の経過」→プリント・文章「ウィルソンの14か条」→スライド・写真「ドイツのインフレーション」→プリント・表「ドイツのインフレーション」→

プリント・文章「ウィルソンの14か条」とした。その根拠は次の通りである。最初に略年表「大戦の経過」をもってきたのは、既習事項の確認をしながら生徒の既有体験の補充をし、課題把握までの思考の流れをスムーズにするためである。次に提示する「ウィルソンの14か条」では、敗戦国に対して無賠償・無併合が主張されており、生徒がその考え方に共鳴することが予想される。ドイツのインフレーションのスライドと表を提示したあとで、もう一度「ウィルソンの14か条」にもどった方が、課題意識を高めるのに有効であると判断したためである。

事後調査の結果を実態調査の結果と比較してみると、「面白くなかった」生徒が5.3%、「やる気がおきなかった」生徒が2.6%に減少しているのは評価できる。また、挙手できた生徒が89.5%、発表できた生徒が57.9%であったのは普段の授業よりも生徒の授業への参加が得られたと考えられる。本時の学習は、課題に対するまとめを、さらに発展させていくものであったが、この時間の学習が「わからなかった」生徒は2.6%にとどまっている。これは、課題把握場面の課題意識が単位時間をとおして継続的にはたらいた結果と見ることができる。

ミニテストの正答率は前回と同程度であった。正答率92.1%から本時の目標は概ね達成できたと判断する。

しかし、前回の授業の結果と比較してみると、生徒はかなりマイナスの印象をもったのではないと思われる。その原因は2つ考えられる。第1の点は、資料の内容理解のために必要な知識・理解が身につけていなかったため、面白さや成就感・意欲を阻害してしまったということである。「インフレーション」については、「元禄時代」の貨幣改鋳、「秩父事件」の松方デフレーション政策で通貨量と物価の関係として学習している。レディネステストの結果、68.4%の生徒がその概念をもっているの、解説で補足すればよいと判断したが甘かったようである。抽象的な概念なので、レディネステストにあらわれた以上に定着度は低かった。同様に「委任統治」という言葉も生徒にとっては難解な語句で理解が困難であった。

第2の点は、第1回検証授業の反省から、強い概念コンフリクトをおこすことを心がけたが、課題把握の前段階で時間がかかりすぎたため逆に生徒の学習意欲をそぐ結果になってしまったということである。学習課題に達する前に、「大戦の終結の経過」「ウィルソンの14か条」についての理解を図ったが、この段階で集中できなくなった生徒がでている。このことから言えることは、資料提示には「具体的なものから抽象的なものへ」という明確な順序性の原則があるということであろう。

今回の授業の大きな収穫は、抽出生徒女子Aが前回と同様、学習に意欲を見せたことである。成績のふるわない男子Aも課題をつかむ前の段階でスライドに興味を示した。また第2回検証授業の感想に、「ウィルソンの14か条が、ベルサイユ条約で活用されなかった理由を知りたいと思った」「ドイツのインフレーションや第1次世界大戦をもっと深く勉強してみたいです」と記述した生徒が出てきたことは、生徒の中により高度な課題意識をもつものが出てきたからであると考えられる。このことから、単元を通して課題意識を高める指導を続けていけば、社会科の授業に対する「おもしろくない」「わからない」意識を変えられると考える。女子Aのように、授業に対する積極的な参加態度を身につけさせれば、社会的な思考力が徐々に育ち、やがて社会科の学習の目的を理解してくれるよう

になると考える。

VI、研究のまとめと課題

1、研究のまとめ

- (1) 課題把握場面で生徒の思考の流れに配慮し、「興味・関心をひく資料」「疑問をもたせる資料」「課題をつかむ資料」を用いることは、課題意識を高める上で効果があると言える。その際の資料の要件も妥当であったと言える。
- (2) 「興味・関心をひく資料」と「疑問をもつ資料」の間に概念的コンフリクトをおこさせることは生徒の課題意識を高める上で効果がある。
- (3) 資料の提示には、「具体的・感覚的な資料」から「抽象的・論理的な資料」へ、という順序性がある。この順序性にしがたって資料を提示すれば効果は高いが、順序性が失われると効果は低くなる。
- (4) 課題意識を高める資料の作成と活用を、単元を通して行うことによって、生徒の社会的思考力を伸ばすことができる。

2、今後の課題

- (1) 本研究で得た資料作成の要件が、他の単元や異なる分野にも適応するかを今後の実践を通して検証しなければならない。
- (2) 要求されるような条件を備えている資料を作成するためには、日頃の資料の蓄積がかなり必要である。それがなければ、実践にうつすことはできない。効果的な資料の収集・整理・保管の方法を検討しなければならない。
- (3) 生徒の既有経験との間に概念的コンフリクトを起こさせる資料を作成するためには、生徒のもつ既有経験の洗いだしの方法を研究しなければならない。とくに情意面の傾向や、認知のパターンを把握するのにどのような方法あるかを今後研究して行きたい。
- (4) 疑問と学習課題の間にギャップがありすぎると課題意識は阻害されてしまう。生徒の疑問が生かされるような、学習課題の設定のしかたを研究する必要がある。
- (5) 生徒の多様な思考を導き出すために、小集団を活用した授業の構成を研究する必要がある。

VII、おわりに

この研修は、自分自身の授業を客観的に見直すよい機会であった。また直感的ではなく分析的に見直すことができたことで、授業で抱えていた問題点を改善する糸口がつかめたような気がする。今後は、この研修でつかめたことを生かしながら、残された課題をさらに追求していきたい。

最後に、お忙しいところ3か月の長期にわたり温かくご指導ご助言くださった、山科博指導主事をはじめ、山形県教育センターの諸先生方、ならびにこの研修の機会を与えてくださった関係各位に深く感謝申し上げます。

平成元年度
山形県教育センター
長期研修（後期）
研究報告書

個に応じた学習課題を見つけるためのパソコンの利用について

——— 短距離走の指導を通して ———

新庄市立新庄中学校教諭

城 水 義 邦

目次

I. はじめに	1
II. 研究のねらい	1
III. 研究の仮説	2
IV. 研究の方法と内容	2
1. 「短距離走」についての走法分析	2
2. 課題に応じた練習法	5
3. ソフトの作成	8
4. 検証授業と考察	8
V. 研究のまとめと今後の課題	9
1. 研究のまとめ	9
2. 今後の課題	10
VI. おわりに	10

主な参考文献

文部省	中学校学習指導要領(平成元年3月)	大蔵省印刷局
文部省	中学校指導書保健体育編	大日本図書
熱海則夫・辻村哲夫	改定学習指導要領の展開総則編	明治図書
浦井孝夫・山川岩之助	改定学習指導要領の保健体育科編	明治図書
古山茂清	中学校3年男子における短距離走(60m走)の指導について (山形大学教育学部附属中学校研究紀要第25号)	
金原 勇	陸上競技のコーチング(I)	大修館書店
金原 勇・猪飼道夫	陸上競技(トラック編)	学芸出版社
帖佐寛章・佐々木秀幸	陸上競技(練習法百科)	大修館書店
湯浅徹平	陸上競技入門シリーズ短距離編	ベースボールマガジン社
	陸上競技マガジン	ベースボールマガジン社
	月刊陸上競技	講談社
芦葉浪久	コンピューターの学校教育利用	東京書籍

I. はじめに

「楽しい体育」と言われて久しいが、この「楽しい体育」の考え方がときとして誤って捉えられ、単に楽しければよいのだと考えられがちである。そんな考え方からか、「体育は楽しいが、陸上競技は嫌いだ」と答える生徒が多い。その中でも、短距離走や長距離走などは、「授業中に何度もただ走らされるだけで」などと答える生徒も少なくない。そこで本校でも数年前から短距離走の教材は、リレーを中心に指導し、走り込むことを主にしてきた。

生徒は意欲的にリレーに取り組んでいるが、短距離走の持つ特性そのものに十分に触れるということはなかなかできない。

平成5年度から全面実施される新指導要領の保健体育の目標の第一に、「各種の運動の合理的な実践を通して、運動技能を高めるとともに運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにし、生活を明るく健全にする態度を育てる。」とかかけられている。このことは、自己の能力に適した課題を持ち、それを解決する学習を通して、運動の楽しさや喜びを味わわせ、運動は楽しいものであるという実感を体験させることにより、授業への取り組みが積極的になり、授業において養われた運動実践の能力や態度が授業以外の場においても生かされるものとする。

短距離走という教材は、自己の能力に適した課題を持たせて練習させることが大切であるとされているが、生徒自らが自己の課題を見つけることはなかなか困難である。したがって、どうすれば自分の能力を最大限に発揮して記録を短縮していくことができるのか、わからないまま授業に取り組んでいる場合が多い。

ここにパソコンを導入することによって、人間の目で見ただけや、ビデオ撮影などによって見ただけではわからない点を明らかにすることができるのではないかと考えこの研究に取り組んだ。

II. 研究のねらい

これまで短距離走を指導するとき、スタートの技術や全力走のフォームなどの指導をしてきたが、一斉指導になりがちで、個々の生徒の課題を解決することはなかなかできなかったし、個々の生徒の課題そのものも把握できずにいたのではないと思う。そこで、パソコンの持つ、処理能力の速さ、正確さ、人間の目で捉えるできないことを表わすグラフィック機能、個別学習に対応できる。これらの特性を生かし、これを有効に活用することにより、個々の生徒が、短距離走における自己の練習課題を明確に把握することにより、主体的に学習活動ができるものと考えた。

短距離走における疾走中の速度の変化に視点をおき、その変化が起こる走法の問題点、そして、それを改善するための練習方法を個々の生徒が見つけ出し、主体的に学習活動を進めていけるような授業の構造化をねらいとした。

III. 研究の仮説

 * 自己の100m走における速度変化を、パソコンを用いてグラフ化し、 *
 * 一人ひとりの生徒が、短距離走における学習課題を明確に把握することに *
 * より、主体的に練習に取り組めるのではないか。 *

100m走において、その疾走速度は、スタート前の速度0の状態から徐々に加速されて、最高速度になり、その後多少変化をしながらゴールに到達している。その変化については、実際疾走している生徒自らが把握することはほとんど不可能であり、ビデオなどを利用したとしても不可能であろう。そこで、疾走速度の変化をパソコンを利用してグラフ化することにより、自己の疾走速度変化を明確に把握し、さらにFCAIによる学習の個別化をはかれば、個々の生徒の学習課題が明確になり、意欲的な授業への取り組みがなされるものと考えた。

さらに、100m走のスタートからゴールまでを加速の区間、スピード維持の区間、スピード持続の区間とわけて考えたとき、それぞれの生徒は必ずしも理想的な速度の変化はしていないものとする。各区間の自己の速度変化の原因を探り、その修正をすることにより自己の能力に応じた100m走の記録の向上が見られるであろう。

IV. 研究の方法と内容

1. 「短距離走」における走法の分析

短距離走における理想的な速度変化は、右の図1のようなものであると言われている。しかし、これは訓練された一流選手に言えることであり、実際に中学生においてはどのようなになっているのか調査をおこなった。

調査は、本校生徒 1年生 男子84名、女子97名、2年生 男子60名、女子73名、3年生 男子34名、女子49名を対象に実施した。

調査方法は、図2のような方法でビデオ撮影を行い、それによって100m走における各10m毎の通過タイムを測定した。

この測定結果をグラフ化し、スタートから30mまでの「加速の区間」、30mから70mまでの「スピード維持の区間」、70m以後の「スピード持続の区間」に分け、それぞれの区間のグラフの形から、次のようなタイプに分類してみた。

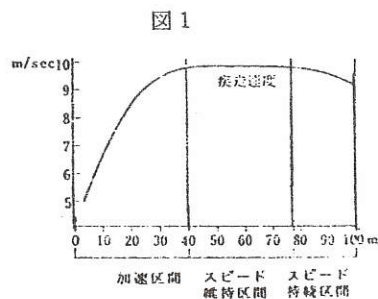
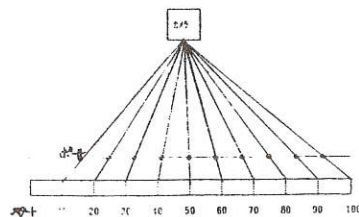


図2 測定の方法



(1) 加速の区間

この区間は、できるだけ速やかに速い速度を得ることが大きな課題である。スー一流選手は、だいたい6秒で最高速度に達するといわれているが、訓練されていない中学生などはもっと短い時間で最高速度に達してしまっている。

このような考え方から、この区間のグラフについて、次の3つのタイプに分けることができた。

① Aタイプ(図3-1)

この形は理想的なグラフに近い形。

② Bタイプ(図3-2)

クラウチングスタートがあまり上手でなく、スタート直後に立ってしまい、スタンディングスタートと同じようになっている。そのためそこでの時間的ロスと、スタート直後に大きな加速が得られず、20m地点までのグラフが直線的になっているのだと考えられる。さらにこの形の生徒の場合、20m地点以前に加速が終わり、グラフは20m地点で大きな角度で折れている場合が多い。

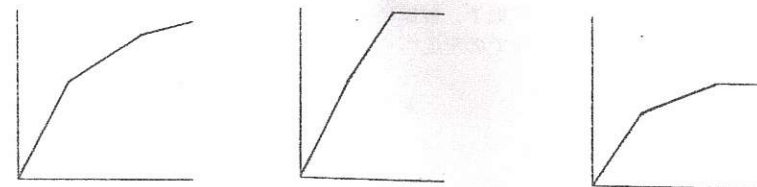
③ Cタイプ(図3-3)

筋力不足やその他の理由から短い距離で加速が終わってしまっている。したがって、グラフは10m地点で大きく折れた形を示している。

図3-1

図3-2

図3-3



(2) スピード維持の区間

この区間は、最高速度に達してその慣性で大きな速度をできるだけ経済的に保持していくことが大切な区間である。したがって速度の変化がほとんどないことが望ましいと考える。しかし、カール・ルイスが9秒93やベン・ジョンソンが9秒83(問題になった記録であるが)を記録したときの各10m毎の通過タイムからグラフを作成してみると、ふたりのグラフは、まったく同じ形を示し、多少の速度変化を持たせて疾走しているようである。これは、最高に訓練された選手が、このあとに続く「スピード持続の区間」での速度低下を避けるためであると考えたほうがよいと思われる。したがって、中学生の場合は、速度が変化せず、グラフは、水平で直線的になることが理想とすべきだと考える。

このような考えから、この区間も次の3つのタイプに分けることができた。

① Aタイプ(図4-1)

この形のは、グラフ上からは、理想的な走りをしていてと捉えてよいだろう。しかし、生徒の中には、長距離走的な走り、本当の意味での全力疾走をしていない場合も考えられるので、どれだけ速い速度が保持されているのかを注意して見るべきだと考える。

② Bタイプ(図4-2)

グラフがこの区間で上がったり下がったりしており、速度の変化が激しい疾走をしている。これは、疾走フォームがリラックスされた状態になく、必要でない筋肉までも緊張させた状態で走っているためと捉えてよいだろう。そのために腕振りのバランスが悪かったり、ストライドに変化が出てきていることが考えられる。また、訓練された一流選手でも、本当の意味での全力疾走ができるのは30m程度といわれているが、中学生はそれより短い距離しかできないはずであり、気持ちの上でのがんばり過ぎからか、呼吸を何度もしながら疾走していることも考えられる。

③ Cタイプ(図4-3)

距離が進むにつれグラフが下がってくる傾向にある。これは、最高速度を保持することができないためだろう。その原因のとして主なものとして、疾走フォームのまずさからの速度低下、酸素負債能力が劣っているためによる最高速度維持能力の低さ、精神的面でのがんばって最後まで走りとおそうとする意識の欠如、などが考えられる。

図4-1

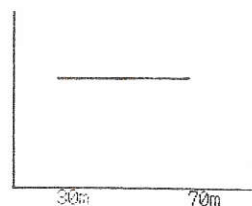


図4-2

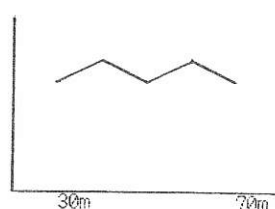
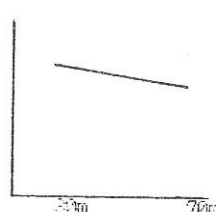


図4-3



(3) スピード持続の区間

この区間では、体力不足、走法の問題、精神的な面などが原因となっても速度が低下してしまうことが多い。

しかし、前述した、ルイスやジョンソンなどはこの区間において再度加速をしているが、中学生などは、ここまで全力で疾走してきたら再度加速することなどは不可能なことであろう。

したがって、いかに減速を避けるかということが大きな課題になるだろう。本校生徒の場合は、次のような3つの形に分けることができた。

① Aタイプ(図5-1)

グラフ上からは、理想的な走りをしていてと捉えてよいだろう。しかし、この前の区間の走りがどうなっているのかを見る必要がある。前の区間を遅いスピードで疾走してきた場合は、この区間の速度低下はおきないし、さらに加速することも可能だと考えられる。

② Bタイプ(図5-2)

90m以後急に速度が低下し、急にグラフが下がる。主な原因として考えられることは、ゴールを意識するために体を必要以上に前に倒してしまう。ゴールすると同時に止めようとするため、体を後傾させ、足でブレーキをかけている。意識的にか無意識的にかゴール前で力を抜いているなどが考えられる。

③ Cタイプ(図5-3)

70mあるいは80m付近から急に速度が低下しグラフが下がる。これは、疲労がしだいにたまってくるための速度の低下、筋力、酸素負債能力不足からくる後半の速度低下、ゴールを意識したフォームの乱れ、意識的にか無意識的にかゴール前で力を抜いているなどが考えられる。

図5-1

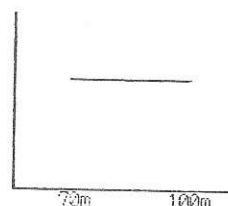


図5-2

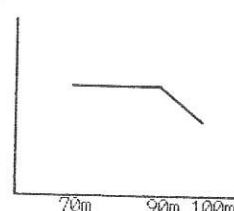
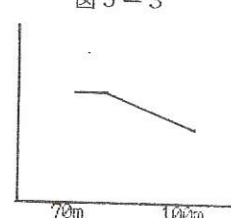


図5-3



2. 課題に応じた練習法

以上のように各区間、各タイプ毎の走法を私なりに捉えてみた。そしてこれらの走法の改善により、グラフはより理想的なものに近づき、100m走における記録の向上が見られるはずだと考え、その改善のための練習方法として次のようなものを取り上げてみた。

(1) 加速区間を重点に練習するために

① スタートの技術を高めよう

ア、スタートから1歩目~3歩目までの望ましいところに印をつけて、確実に踏みつけながらダッシュをする。

イ、スタートの第1歩目の動きをねらいとして、スタートラインの前方(10cm)くらいのところに低いヒモ(10cmくらいの高さ)をはりそれを踏み越えて1歩目を着くように練習する。

ウ、1歩目を踏みつけたときの構えからスタートする。腕振り、前傾、脚の動きなどに注意してダッシュする。

② 力強いダッシュをするために

ア、坂登りダッシュ

上り坂を利用して、ダッシュをし、地面をしっかりと押す力をつける。

イ、引っ張りダッシュ

ゴム・チューブを腰につけてパートナーから引っ張ってもらいダッシュをする。(ゴムを引く人は、あまり強く引き過ぎないで、がんばれば正しいフォームでダッシュできるくらいの力で引く。)

③ スムーズな加速と大きい速度を得るために

ア、助走つきダッシュ(20m~50m)

3~4歩気楽に助走した後で、全力で加速する。ダッシュそのものの練習になるので、3~5歩あるいは6歩目まで足の着く位置に印などを付けるとよい。

イ、ピック・アップ・ランニング(ローギアからハイギアへのきりかえ)

10mくらいのジョギングから自然に加速して、15~25mくらいでトップスピードになるように走る。急に速度を変化させないように注意する。加速(ピック・アップ)のときの動きを強調して練習する。

ウ、傾斜を利用したダッシュ

ゆるやかな下り坂を利用しダッシュを行う、スピードがついてきたら数10mをそのままの状態で行く。脚の動き、上体のバランスに注意して練習する。

(2) スピード維持区間を重点に練習するために

① リラックスされた走りをするために

ア、ウインド・スプリント

気持ちよく、しだいに加速(30~40m)して全速疾走(30~40m)にはいり、その後のびのびと今までの惰性で走る(30~40m)。そして自然に止まるのを待つ。

イ、ウェーブ・ランニング

しだいにスピードをあげて走り、最高のスピードになったらその惰性を利用して走り続ける。自然にスピードが落ちたら、またスピードを最高まで引きあげる。最高の山を2つまたは3つ作るようにする。急なスピードの変化をしないように注意する。100m~120mの距離で練習するのがよい。

エ、テンボ走

80m~150mくらいの距離を全力疾走の70%~80%くらいのスピー

ドで、軽快なリズムで、リラックスして走る。ゆるやかな下り坂なども利用すると効果的である。また、両手にバトンやテニスボールなどを持ち、手の握りをリラックスすることにより、体全体をリラックスさせることなども効果的である。

② 最高スピードを落とさないために

ア、ボールまたぎこし走

30~40mの距離をとり、自分のストライド^{*}かやや広めの間隔で、空気の抜けかかった、バレーボールやまり入れの紅白まりをおき、10mくらい助走した後これを踏まないようにまたぎこして走る。

イ、ウインド・スプリント

ウ、ウェーブ・ランニング

エ、インターバルランニング

50mを全速の60%くらいのスピードで走り、その後50mをジョグする。これを5~6回くり返し、十分休息したらもう一度2~3回くり返す。グループで一緒にすると効果がある。

(3) スピード持続区間を重点に練習するために

① ラストスパートを大切に

ア、10mくらい助走をし、リラックスした状態(全力の70~80%のスピード)で40mくらいを走り、その後の20m程度を上体のバランス、腕の振り、脚の動かし方に注意し全力で走る。その後自然に止まるまで走り続ける。

② 前半部分の走り疲れをため

ア、ウインド・スプリント

イ、ウェーブ・ランニング

③ 後半部分でのフォームの乱れとスピード低下をさけるため

ア、オーバー・ディスタンス・スプリント

150m~200mくらいの距離を、全力の80~90%のスピードで走り通す。特に、最後の50mくらいをフォームがくずれないように注意して走る。これを3~5回くり返す。

イ、テンボ走

ウ、インターバルランニング

50mを全速の60%くらいのスピードで走りその後50mをジョグする。これを5~6回くり返し十分休息したら同じことを2~3回くり返す。

以上のような練習方法の中から、生徒が自己の速度変化のグラフを見て、自分の走法の問題点を探り、個別の課題を持ち、その解決のための練習方法を見つけ出し、主体的に練習に取り組めるように指導過程をくんだ。

さらに同じ課題を持つ生徒同志がグループで、協力しながら、学習を進められるようにした。

3. ソフト作成

速度変化をグラフ化するBASICプログラムと、FCAIシステムを使用し、個々の生徒が自己の学習課題を見つけるための速度変化グラフ作成ソフトと短距離走学習のコースウェアを作成した。

指導計画は、短距離走の単元を12時間扱いとし、グラフ化するプログラムは、自己の100m走全体の変化を見るためのときだけでなく、前述した各区間の練習をしている中で、その区間だけの速度変化も見られるようにし、授業の中で随時利用できるようにした。

FCAIコースウェアは、第3教時目の自己の課題発見の時間と、第8教時目の新たな課題を発見するときに使用することにした。

特に配慮したことは、自分の100m走がなぜグラフのような速度変化になっているのか資料などをもとに原因を探り、どんな点に注意して走ればよいのか、より理解しやすいように図案化し表わすようなフレームを多くした。

パソコン操作になれていない生徒のため、テンキーかリターンキーだけでフレームが進めるようにした。

グラフ化する、BASICプログラムは、メニュー画面で自分の練習している区間を選んで入力できるようにし、ハードコピーでグラフをプリントアウトできるようにした。

4. 検証授業と考察

短距離走の単元を12時間扱いとし、検証授業は、下記の通り2教時目と3教時目について実施した。

(1) 検証授業の実施

① 実施月日・場所

ア、平成元年11月24日(金) 5校時 「100m走のタイムの測定」
新庄市立新庄中学校グラウンド

イ、平成元年12月 1日(金) 5校時 「短距離走の練習課題発見」
最上地区教育研究センター

② 対象生徒

新庄市立新庄中学校2年E組男子17名

(2) 検証の観点

① 研究の仮説を受けて、短距離走において、目では見えないことがパソコンを使

用することにより明らかにされ、個々の生徒が自己の学習課題を見つけることができるか。

② パソコンを用いた授業で、生徒の関心の度合い、パソコン使用上の問題点を明らかにする。

(3) 授業の考察

授業の最初に、「あなたは、100mをどのくらいのタイムで走れると思いますか」、「あなたの速度変化のグラフはどのようなになっていると思いますか」、「あなたは、どんな練習をすればもっと速く走れると思いますか」などについての調査を行ったが、タイムについては、ほとんどの生徒が実際の測定タイムに近いタイムを記入した。しかし、グラフについては、スタートから、ゴールまで徐々に加速している形とか、ほとんどが実際のものとかけ離れたものを予想した。練習方法については、「体力をつける」、「足を速く動かす」、「腕を大きく振る」、「最後までがんばる」などと数名書いただけで、あとはわからないと答えた。

実際の授業では

① 自分の速度変化のグラフを見て、なぜだろうと興味、関心を持って授業に入ることができた。

② 自分の練習すべき区間を選択するとき、理想的なグラフと違う点が2区間にまたがっていたりして、戸惑った生徒がいた。

③ 全生徒が自分の練習課題を見つけ、学習ノートから練習メニューを選択することができた。

④ 生徒の進度を把握するために、LANシステムなどが設置されておればより効果的に学習が進められるのではと思った。

V. 研究のまとめと今後の課題

1. 研究のまとめ

(1) 短距離走の指導において、パソコンを利用し疾走速度変化をグラフ化することにより、生徒自身、自分が見ることができないものを発見することができ、自分の課題を把握するのに非常に効果的であった。

(2) パソコン活用学習は、それぞれの生徒が、異なる課題を持つとき、個別学習を進めるうえで効果的であった。

(3) パソコンを授業過程で活用するときは、活用目的を明確にし、教材研究を十分行い、コースウェアを吟味して設計すべきである。

(4) 体育授業の中でもパソコン活用は、単に統計処理のためだけでなく、授業過程で活用していくことが有効である。

- (5) 数名の生徒に、それぞれの課題に応じ、適した練習方法に取り組ませた結果、練習前より、グラフは理想的なものに近づき、100m走の記録も向上していた。

その一例として、加速区間を重点に練習をし、メニューは、スタートの技術練習、助走つきダッシュ、ピック・アップ・ランニングを中心に練習をした生徒のグラフの変化である。図6-1 図6-2

図6-1

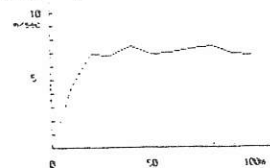
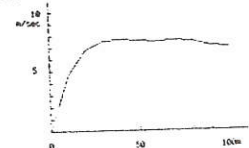


図6-2



2. 今後の課題

- (1) 本研究の一つのポイントでもあった、短距離走においてどのような練習をすれば、自己の速度変化を理想的なものにし、記録が向上するか。については、継続的に授業の中で実践し深めていく必要がある。
- (2) 今回作成した、速度変化をグラフ化するソフト及び、課題発見のためのコースウェアを、他のクラスにおいても実践し、さらに修正を加えていく。
- (3) 体育の授業におけるパソコン活用は、まだ十分研究されていないが、リレーの指導、長距離走の指導、走り幅跳びの指導などでも十分活用できる可能性を見つけることができた。さらに集団的スポーツ（球技など）の指導においての活用なども研究していきたい。

VI. おわりに

研修の当初、本校にも今年度中に十数台のパソコンが設置されるということもあり、「パソコンの操作法を研修しなくては」、「プログラムを作成しなくては」という考えが強かった。しかし、毎日の授業にいかに関心した生徒が意欲的に取り組み、楽しく活動し、力がついていくのかを研究する必要があるのだと改めて考えさせられた。そのためには、教材研究を十分行い、生徒の実態をしっかりと把握し、その上で授業過程を組み立てる重要性を認識させられた。

実際に生徒の100m走の速度変化をグラフ化してみると、何が原因でこんな形のグラフになっているのだろうかとか今まで考えても見なかったことが非常に多く、これを機会に、体育における見る目、見方をもっともっと養う必要性を痛感した。今後とも、常に研修をするという姿勢で励みたい。

最後に、研修期間中、暖かくご指導くださいました児玉勝義先生をはじめ、県教育センターの諸先生方、また今回貴重な研修の機会を与えてくださいました関係各位に対し深く感謝申し上げます。